# ろう文化と社会学

## ――聴者によるろう文化理解は果たして可能か？――

金澤貴之
樫田美雄
上農正剛
岡田光弘
西澤弘行*1

＝ミニ・シンポジウムの諸データ＝

日　　時……2000年４月22日（土）午後４時～６時30分
場　　所……筑波大学　つくばキャンパス　人文社会学系棟　A110室
司　　会……岡田　光弘（国際基督教大学）
聴　　衆……約三十名（筑波大学，一橋大学，徳島大学の研究者が中心）
パネラー……金澤　貴之（群馬大学教育学部）＆樫田　美雄（徳島大学総合科学部）
コメンテーター……上農　正剛（九州保健福祉大学保健科学部）
手話通訳……３名の要員により実施した。

【序文：掲載に至るいきさつ，ミニ・シンポジウム開催前後のようすなど】

ここに掲載するのは，平成12年４月22日に，筑波社会学会定例研究会の中

＊１　金澤貴之は，群馬大学教育学部障害児教育講座教員（メールアドレス：takayuki.kanazawa@nifty.ne.jp），樫田美雄は，徳島大学総合科学部人間社会学科行動科学大講座＝社会学＝教員（メールアドレス：kashida.yoshio@nifty.ne.jp），上農正剛は，九州保健福祉大学保健科学部言語聴覚療法学科教員（メールアドレス：suenou@phoenix.ac.jp），岡田光弘は，国際基督教大学非常勤講師（メールアドレスは，BZG00446@nifty.ne.jp），西澤弘行は，常磐大学人間科学部コミュニケーション学科教員（メールアドレスは，nisisawa@tokiwa.ac.jp）。

の企画のひとつとして開かれたミニシンポジウム『ろう文化と社会学』の全記録（質疑応答，及び，パネラー・コメンテーターの３人による前書きを含む）である。この企画の主催者は，「筑波社会学会（樫田の前任校である筑波大学の社会学関係者が中心となって運営している学術組織）」であった。具体的には，事務局員の赤江達也氏が中心となって事務的な準備を行った。従来，筑波社会学会の企画は，その機関誌である『年報筑波社会学』誌に報告されることが多かったが，今回は，以下の２つの理由，すなわち，①昨年市田・樫田で「言語としての手話・文化としてのろう」を掲載していて「ろう文化」を本誌であつかうことに継続性がある，②テープ起こしを行う実務要員の確保は，筑波大学より徳島大学のほうが容易である，という理由から，本誌が掲載媒体として採用された。なお，デジタル・ビデオカメラによる撮影，および，その撮影されたビデオテープを元にしたテープ起こし等の実務に関しては，阿部智恵子氏＝徳島大学大学院人間・自然環境研究科＝の助力を得た。記して感謝する。

シンポジウムの準備は1999年11月からなされ，半年の準備期間の間に，発表者の打ち合わせを３回，事務局員による勉強会を１回開催した。企画の趣旨は，「ろう文化研究の成果を社会学の共有資産にしていく。調査対象を知るとはいかなることなのか，という問題に関して，『手話』という言語を持つことが明らかになりつつある『ろうコミュニティ』を参照点として考えていく」というものであり，この観点から人選は行われ，「ろう文化」について語れる知識をもちつつ，かつ，社会学理論や人類学理論にも明るいということから，群馬大学の金澤氏と九州保健福祉大学の上農氏に関与してもらうこととした（樫田は，企画者サイドからの参加）。

当日は，開始の30分前から持ち寄ったレジュメに基づく打ち合わせを行った。シンポジウム終了後は，懇親会で意見交換を行ったほか，各人が個別に交流を続けた。今回の報告には，シンポジウムでの発言記録のまえに，各論者が新規に書き下ろした【まえがき】が付加されているが，ここには，この事後のやりとりからの成果が一部反映されている。しかし，発言記録部分は，４月22日時点のものとして校正を行った（活字化にあたり，発言を補った部

分は，原則として，[ ]にいれる形で表示してある)。各【まえがき】とのずれがあるとすれば，上記のような経緯の結果である。ご理解頂きたい。

文中の「小見出し」は，本紀要への掲載にあたって各執筆者が作成したものである。なお，今回の討議の様子はVHSのビデオテープによっても保存されている。関心を持たれた方は樫田（電話＆FAX：088—656—9308＝研究室直通＝，電子メール：kashida@ias.tokushima-u.ac.jp）までご連絡頂きたい。実費でのビデオダビングと郵送のサービスを行う予定である。ご活用いただきたい。

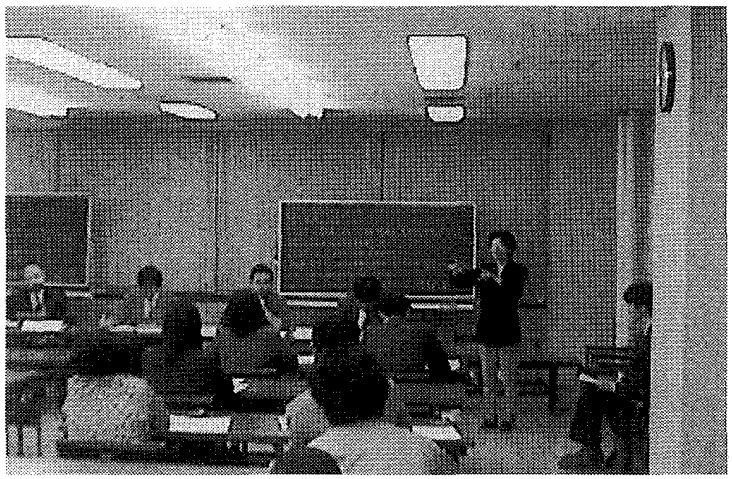
【報告及び討議記録：
ろう文化と社会学　── 聴者によるろう文化理解は果たして可能か？──】
＝目次＝

序文
前書き(1)　金澤貴之
前書き(2)　樫田美雄
前書き(3)　上農正剛
報告１：聴者による聾文化研究の困難性
報告２：「ろう文化」研究とエスノメソドロジー
── 当事者主義を越えて ──
コメンテーターからのコメント
討議記録
文献表

【前書き(1)　金澤貴之】

今回のシンポジウムのタイトルは「聴者による聾文化理解ははたして可能か」というものであった。しかし論点は，聴者であるか／ないか　にあるのではなく，手話ができるか／できないか　にあった。その意味で，タイトルはより正確に言うならば，「手話ができない聴者による聾文化理解ははたして可能か」というべきであった。しかしながら実際の議論はというと，その

具体的な問題について，より具体的に論じていく以前の段階で時間切れであった。もっとプラクティカルな問題を詰めていきたかった。終わってみて率直に感じた感想は，この一言につきる。



会場風景

エスノメソドロジーの観察者主義は，当事者主義批判を行うにあたって，十分な説得力を持ちうる。その意味において，私も樫田氏の主張に共感する。行為の意味は内省に頼ることなく，意味を作り出そうとする相互行為を観察することで分析が可能になる。それは，「本当の気持ちは本人でなければわからない」という当事者主義を否定し，むしろ本人でなくその行為を観察する者によって分析が可能になるということを意味する。議論をこの範囲にとどめるならば，聾者—聴者の問題についても同様のことが言えるだろう。つまり，「聾者でなければ聾文化のことはわからない」という語りの正当性は，論理的には十分な説得力を持ち得ていないと思われるし，聴者であっても聾文化研究を行いうる可能性は十分にあると私も考えている。ただしそれは内省的な理解に頼らない研究が可能であるという意味においてであって，十分に観察を行うために必要なスキルは当然求められるべきであろう。つまり，聾者同士で語られる手話を読みとるだけのスキルがなければ，観察そのものが行い得ないのではないか，ということである。これが今回の私が行った主張であった。

私は「手話ができない者には聾文化研究ができない」といった主張をした。正確に言うならば，手話ができない者が聾文化研究を行ったとしても，聾者の「代弁者」以上の役割を担うことはできないのではないか，という主張である。しかし議論の中で私は何度も繰り返したことであるが，私は当事者主義の立場に立つつもりはない。むしろ観察者主義的な立場に立つからこそ，「手話ができずして，どうやって観察するというのか？」という疑問を樫田

氏にぶつけたつもりであった。

議論がすれ違いに終わったのは，もちろん樫田氏に原因があるわけではない。むしろ，社会学に関する学会においてこの問題を取り上げようとすること自体が，本題に入る前の十分な状況説明を必要とすることになるため，時間配分上，これから突っ込むぞと言うところで終わってしまったのは，残念ではあるが，やむを得ないところである。

さて，手話ができない聴者が聾者の相互行為を観察しようとした場合，いったいどのようにすれば正確な観察が可能になるのか。こうしたプラクティカルな問題について論じたとき，聾固有の問題が浮かび上がってくる。手話がわからなければ，言語をトランスクリプトにすることはできるはずがない。ただしこのことについては，手話言語，聾文化のことに限らず，あらゆる他言語，他文化研究についていえる，当たり前のことである。言語がわからなければ，その言語の記述のしようもない。次に，では言語に関する観察はあきらめたとして，言語以外の身体的な行為についての観察ならば可能だろうかというと，そこで手話という視覚言語固有の問題が浮かび上がる。音声言語を用いる者の行為であれば，たとえその言語が理解できなくても，言語以外の身体的な行為を言語と切り離して観察することができるかもしれない。しかし問題は手話の場合，言語自体が，手指はもちろん，視線，うなずき，表情，身体を使ってなされるものだということである。手話言語を理解できる者であれば，言語行為とその他の身体的な行為とを区別することができる。しかし，それを理解できない者にとっては，言語以外の身体的な行為を切り離して分析することもできない以上，言語以外なら観察が可能であるという主張すらも危ういものとなってしまう。具体的に言えば，手話を理解できない者には「眉をしかめた(＝不快感の意志表示)」と観察された行為が，手話話者にとっては感情表現ではなく，疑問文の構成要素としての非手指マーカーかもしれない。このように考えると，手話ができない者が聾文化研究を行うということは，無謀としか思えないくらいの困難性を負っていると思われてならないのである。

本来ならばこうしたプラクティカルな問題について，シンポジウムの席上

で議論できればよかったと思っているが，一足飛びにそうした議論に入れないところもまた，聾文化研究に関する議論を行う際の困難さだと言えないこともない。また席を改めて，議論を交わせることを願っている。

最後に，上農氏からの質問（37頁参照）に答えておきたい。ここで言及したことは，キュードスピーチや指文字の手指動作が手話に借用されるということではなく，非手指動作の使用である。聾児同士のキュードスピーチは，聴者教員のそれとは異なり，日本手話で使用されるような非手指動作が用いられていると見受けられる。このことは聴者には見えにくい現象であり，言語としての使用状況の実体を観察できないまま観念的に整理することの危険性があると言いたかった。また，シンポジストに聾者がいなかったことについてもご指摘いただいた（10頁参照）。これについては，用意しなくてもいいと思っていたのではなく，できなかったというのが正直なところであり，大きな反省点として受け止めている。こちらの準備不足もあり，社会学的な議論において適切な聾者が見つからなかった。聾教育や手話言語学については専門的な発言ができる聾者が増えているが，社会学については端緒についたところと感じている。結局当日はフロアの聾者に，気になる議論への反論をお願いするにとどまってしまった。願わくば，この記録をより多くの聾者に読んでいただき，ご意見をよろしくお願いいたします。

【前書き(2)　樫田美雄】

今回のシンポジウムの第一の反省は，上農氏からの指摘にもあるように，「当事者」としての「聾者」の見解を十分に踏まえることができなかった，ということである。「当事者主義批判」をフェアに行うための準備的手続きとして，「当事者」からのあり得る見解の網羅的整理が必要だったと思う。けれども，その一方で，議論の出発点としての，問題の洗い出しの作業としての意義は達成できたのではないかと思う。また，「非ネイティブによるネイティブ理解は可能か？」(例：非日本人による日本人理解は可能か？，男性による女性理解は可能か？，ロボットによる人間理解は可能か？……）という形で，今回のテーマは，現代の多様な社会学の領域に応用可能である，と

いう見通しにも確信が持てた。やはりこのテーマ(「ろう文化と社会学」)は扱う価値がある，というのが私の議論を終わっての感想である。

議論の今後の発展のために，登壇者間で話がかみ合わなかったところを，いくつか整理・確認しておこう。

金澤と樫田の間の食い違いを一言で言うと，「聾者」や「難聴者」がおかれている具体的な現代日本の状況を，どれほど取り込んで論じるべきか，という点で意見の相違があった，ということだと思う。すなわち，金澤氏も樫田も，理論的には，「聴者」が「聾者」や「手話」を研究できる可能性がある，と考える点では意見を一致させることができたのだが，「現実の研究」を考えた場合の見解としては，金澤は「かなり困難（これまでできてこなかったことを踏まえることが重要）である」という立場をとり，樫田の「十分可能（エスノメソドロジー的実践はそれを可能にしつつある)」という主張と食い違っていた。樫田は「マッキーブニー」のようにすればできる，と主張したが，金澤側からすれば，マッキーブニーの研究は通訳（インフォーマント）に大きく依存している，ということを指摘することになるだろう。

また，上農氏からは，「まったくわからなかった」とすがすがしいぐらいはっきりとコメントされた。このすれ違いの原因の過半は，樫田側に，上農氏と金澤氏との間で交わされたような専門的な討議に参加する準備がなかったという点に由来すると自覚し，反省している。

今回のシンポジウムは，ある意味で準備的なシンポジウムである。社会学は，今後も『ろう文化宣言』からのインパクトをうけて，思考を続けることになるだろう。その際のトピックの一覧表の一つのプランを提出したものとして，今回のシンポジウムを位置づけることができるだろう。この整理的価値を高めるために，いささか屋上屋の感もあるが，二人のパネリストおよび，コメンテーターに，各人の「前書き」を寄稿してもらった。何を論じ得たか，そして，何を論じ得なかったかが，この「前書き」部分を読むことで，すこしでもわかりやすくなっていれば，幸いである。

【前書き(3)　上農正剛】

このシンポジウムのテーマは「聴者によるろう文化理解は果たして可能か」というものでした。私は依頼時にこのテーマを知らされたのみで，後はコメンテーターとして話をするようにということを聞かされていただけでした。発表者のレジュメ資料も直前になって送られてきたし，金澤先生の当日の発表内容は，そのレジュメとも異なっていました。つまり，どのような議論が交わされるのか皆目検討がつかないまま，筑波に向かったというのが正直なところです。いろいろな意味から，以上のような条件で臨んだシンポであったということを記録としてここに記しておきます。社会学の学会ということを聞いていたし，議論の中核は「理解」という問題にかかわるだろうという予想から，ウェーバーあたりの「理解」概念からきっちりした議論が始まるのかと思っていましたが，実際はかなり違った展開でした。しかし，校正刷りを読み返しつつ振り返ってみると，個人的には，結果として根本的な問題について改めて考えさせられたという意味で勉強になったシンポでした。この点については，金澤，樫田，岡田の各先生にお礼を申し上げます。同時に，気付いた問題点も多少あるので，そのことも踏まえ，以下に感想を簡単に記します。

まず何より，「聴者によるろう文化理解」というテーマ自体の理解について，二人の発表者とコメンテーターの間で全く確認がなされていなかったという問題がありました。その結果，議論が噛み合わなかった点がありますが，その噛み合わなさの意味を考えることで，各自の「理解」ということに対する「理解」像をおぼろげに理解することが出来たという皮肉な成果がありました。根本的な問題はおそらく二つあります。①「ろう文化」という時，具体的に何を（どのような現実の状況を）対象にしているのかという問題。②もう一つは「理解」ということをどのようなものとして考えているかという問題です。

①の問題は，「現代思想」掲載の拙論に対して金澤先生が示された批判の中に照らし出されていると思います。シンポの中でも言いましたが，例えば音声言語を身につけた難聴者の中には，その自己像を修正して，改めて「ろ

う者」になろうとする人たちがいます。例えば，そのような人たちが言う「私はろう者だ」という時の「ろう者」をも，私は自分の問題圏の中に入れています。むしろ，このような文脈の中での複雑な意味を帯びた「ろう者」問題をこそ私は考え続けてきました。しかし，金澤先生はそうではなく，狭義の，つまり，日本手話を母語としているような「ろう者」を対象にされているように見えます。ただし，私にはこの点は今もって判然としません。ろう者の定義として，木村さんと市田さんが「ろう文化宣言」で提示された，限定された狭義の規定を金澤先生は支持されているのか，そうではないのか。金澤先生の御意見には，そうであるように見える部分と，そうでないように見える部分が混在しているように私には思えます。私の考えはハッキリしています。限定した狭義の定義は認めています。だからこそ，難聴者のろう者へのシフト問題も，独自の検討課題として意味を持つ訳です。

このあたりのことは，私が「現代思想」の拙論に添付したベン図の問題とも関係します。「形式的な分類にとどまっている」という金澤先生の批判に対しては，分類という手続きが持つ意味（効用と限界）について，きちんと議論しなければなりませんが，長くなるので今回は割愛します。ただし，「手話言語に近い形に変形されて使用されている指文字」という言語現象については，ベン図（19頁，図１参照）では数字は割り振ってありませんが，日本手話と指文字の円が重なった部分に位置づけられると私は考えています（キュードスピーチが手話言語に近い形に変形されて使用されている事例があるというのは，キューサインが何かの単語を表すシンボル（頭文字）として使用され，それが日本手話の文構造の中にきちんと位置づけられているということでしょうか？）。

②の「理解」ということについても言っておきたいことがあります。シンポの最後の部分で，「深い」研究は結局，ろう者自身にしか出来ないのではないかと述べました。これに対して，金澤先生が「他者としての研究可能性」ということを主張しつつ反論されました。この反論については，あの時も今も至極もっともだと思っていますし，「研究」という行為の根本には，むしろ「他者」性が積極的に保持されている必要があることは私にもわかってい

ます。ただ，あの時は，自分の中で不思議な感慨が去来していたのです。唐突な話ですが，金澤先生の話を聞きながら，私の頭にはどういう訳かふと『ヌアー族の宗教』という本のことが浮かびました。イギリスの人類学者・エヴァンズ＝プリチャードの有名な著書です。『ヌアー族の宗教』は私が民族誌の中でも最も好きなものの一つです。事情を説明すると，こうです。昨年，久しぶりにこの本を読み返しました。そして，学生時代に感動した思いとは全く異なる印象を持ったことにショックを受けました。今回読んでみて感じたことは，ある程度は事実に忠実な記録だろうけれど，おそらく何かが決定的に事実とは「違っている」のだろうなということです。つまり，他者の観察の限界という（ある意味で致し方のない当然の）事柄を何か不思議に痛烈に感じたのです。この感慨がシンポの折も頭をよぎったので，あのような発言になりました。この自分なりの問題は「ろう文化」の問題と密着した形で今も頭の片隅でそよいでいます。

金澤先生の発言に触発された形でろう者と難聴者，それぞれの「抑圧体験」の共有問題についても考えさせられました。これが個人的には最も本質的な勉強になった部分です。

最後にひとつ。フロアからも指摘がありましたが，ろう者のパネリストがテーブルについていなかったのは何故だったのでしょうか。こうした事について，金澤先生は常日頃，他人には非常に厳しく対応されている筈ですが。

【報告および討議記録】

## 1　シンポジウムの講師紹介と問題設定

**岡田**：開始が30分遅れました。その分後ろにずれる形で，あとは配布のスケジュール通りに進めていこうと思います。私は今日，司会をさせていただく岡田です。国際基督教大学ほかで非常勤講師をしております。

まず。報告順に正面にいらっしゃる先生方の紹介をしていこうと思います。発表者はお二人です。群馬大学教育学部の金澤貴之先生と徳島大学総合科学部の樫田美雄先生です。コメンテーターは，九州保健福祉大学の上農正

剛先生です。あと，手話通訳の方がいらっしゃいます。Sさんと，Bさん，そしてTさんの三人です。順番に手話通訳してくださいます。

のちほど文章化を考えていますので，みなさん，ご発言のときには，ご所属を一声発声してから発言していただきたいと思います。それから，手話通訳をしていますので，ご発言のときにはマイクをつかって順番に発言する，ということで，同時発話・同時発言が起こらないような形で進めて行きたいと思います。ご協力をお願いいたします。

それでは，実質的な内容の方に移っていきたいと思います。このシンポジウムは「ろう文化と社会学 ― 聴者によるろう文化理解は果たして可能か？―」という題で行われます。まず，「ろう文化」ということについて，少し確認しておきます。『ろう文化宣言』が出されて，それが非常にインパクトがあったわけです。どのようなものかご承知の方も多いと思いますが，黒板にその一部を板書していただきました。

［読み上げ］「ろう者とは，日本手話という日本語とは異なる言語をはなす言語的少数者である」という文章です。これは今日の議論とも関わってきますが，これは一つの定義・提言だったわけです。これは非常に強いインパクトを持ちまして，議論が巻き起こったということです。それは『現代思想』のこの特集号［文献表掲載の『現代思想（総特集：ろう文化）』24―5］の形で，この特集号自体も反響が大きくて，1万部を売り切り，後に本になった，ということです。いま書店には，この本になった形で並んでいます。このように，非常に反響が大きい宣言だったわけです。

その宣言での主張ですが，従来，「ろう」はいわゆる「障害者」として扱われていたのに対して，「ろう」は，文化的な，少数者であるという主張をしたわけです。おもうに，そこでは，文化というものについてかなりハードな，強い主張，言語と文化を1対1に対応させるような，強い主張をしているわけです。で，これ自体が妥当かどうかという議論がのちのち行われると思われます。また，このように文化を主張すると，「ろう文化」というのは，ひとつの文化な訳なのですから，そうした文化を外側から理解するということが可能なのか，「ろう文化」についての理解は果たして可能か，という問

いが必然的にでてくると思います。で，今回，このシンポジウムは，「ろう文化」というものが扱われ，そして，「ろう文化」というものを理解するということが可能なのか，できるとすればどうやったらできるのか，こういった理解をめぐって，進んでいくことになると思います。

ということで，ご報告の方に移らせていただきます。まず金澤先生からお願いします。

## 2　金澤報告：聴者による聾文化研究の困難性

**金澤**：群馬大学の金澤です。3月まで筑波大学におりましたが，4月から群馬大学に移りました。まず最初に，みなさんがお持ちの『筑波社会学会ニュース』などの案内文でのタイトルと今日のタイトルが違います。案内文の方はあくまで仮題であるということをいいわけにして，タイトルを変えました（旧タイトルは，「ろう文化研究と文化相対主義」，当日のレジュメのタイトルは「聴者によるろう文化研究の困難性」）。さらにお配りしたレジュメでは，ひらがなで「ろう」とありますが，私のミスタイプだと思ってください。私は漢字の「聾」の字が好きなんで，こちらに訂正していただけたらと思っています。漢字の聾とひらがなのろうとどっちの方がいいのかについてはいろんな情報がとびかっています。例えば，片方が医学的な定義で，もう片方は文化的な定義をさすのではないか，みたいな話もあります。それで，私自身がろう文化に関する論文を書こうと思ったときにやはり気になって，「ろう文化宣言」を書いた木村晴美さんに尋ねたところ「好みの問題だ」と言われました。木村さんがたまたま柔らかい感じで，ひらがなの「ろう文化」が好きだったので「ろう文化」というタイトルが付いて，そして，たぶんその影響もあって，今日のタイトルもひらがなのろう文化というのが，シンポジウムのタイトルに使われているし，樫田先生もひらがなを使っているし，ひらがなの方が多くはやっているという状況になっているのだと思います。しかし，その「聾文化」を主張しているグループの「Dプロ」のリーダーに米内山さんという方がいるんですけれども，その方は漢字が好きだということで，まさに好みの問題ということです。ただ，本人の中で統一されていない

と，いろいろとクレームがくるんですね。実際私も『現代思想』の臨時増刊号の『ろう文化』の方で，私自身は，漢字にするつもりだったんですけれども，打ち間違いでひらがなが，混じっていたら，その「意味が違うんですか」というクレームが来たこともあります。タイトルを変更した理由は，「文化相対主義」に関して話をしない，というよりは，もっとプラクティカルな話をしたい，ということです。

◎「聾」の社会的構築の担い手

まずこれまでの「聾文化」というか，「聾」とはなにかということが，どうやって構築されてきたか。そこがひとつ重要な所になってくると思います。それは，さきほど司会の岡田さんの方からも，ご説明がありましたように，聾が「障害」としてみられてきた。ですから「障害」に携わる人たち，たとえば「障害児教育」あるいは，「福祉」「医学」そういった関係者が「聾」のカテゴリーを作ってきたわけですね。その中で，手話言語というものが，音声言語と対等なものとしては扱われてこなかったという経緯があります。普通の言語学者の常識というか，とりあえずは相対主義的に考えた場合に，たとえば，自分がAという言語を使っていて，Bという言語が全くわからないとする。自分には意味の分からない言語に接したときに，普通は，それを理解できないときにそれが劣っているかどうかはわからないわけですね。自分にはわからないけれども，自分には優劣が付けられない。そのとき，ともかくそれも同じ対等な言語ではないかという風に想定するわけです。けれども，手話の場合はそうではなかったわけです。それは手話が音声言語ではなくて手を中心に体を使った身体言語だからではないかと思います。手話言語を用いない者にとって，体を使って意思伝達をする方法は何かというと，「身振り」「ジェスチャー」な訳ですね。その延長線上に手話をおいて考えると，いくらがんばってもそれが自分がしゃべっている音声と等価な位の表現能力を持つものには，なり得るはずがないんじゃないか，という想像が成り立ちます。そこで，「身振り」のような具体的な表現はできても，抽象的な内容は表現ができないものとして意味を構築されてきたもの，ということが

手話言語については言えると思います。

そして重要なことは，そのように「聾」や「手話」を構築してきた人のほとんどが，聾者の手話を読みとれていないということです。手話ができなければ，聾者同士が対話をしている場面に参加できないということです。聾者同士，と言った理由は，一応「聾教育」では「口話法」というのを教えているという建前があるわけですし，そうでなくても筆談もありますから，口話でも筆談でも，聴者対聾者の１対１の関係だったらなんとか意志疎通ができるからです。けれども，集団になったらお手上げで，聾者の話が分からない。それはつまり，手話がわからない者たちによって，手話の何たるかが構築されてきたということですね。それが音声言語同士であれば，わからないからといって劣っているとは見なさない。それにもかかわらず，手話に関しては「劣っている」と見なしてきた。このような経緯があります。

そういう背景があって，『ろう文化宣言』が出てきたわけです。それはある意味でナショナリズムだという風に言うことができるかもしれません。実際，「日本手話というのは，世界中のどの言語よりも美しい言語なんだ」という言い方をする人もたまにいます。ただそれがなぜ美しいかというと，手話の手であらわす表現それをみて，美しいと，それは聾者が，そこを誇りにしているという点は，ひとつ，あるとは思います。でも，言うまでもなく，文化相対主義的な視点に立つならば，手話がほかの言語と比べて劣っているといえないのと同じように，優れているということの保証もないわけです。ただ，だからといって安易な相対主義的な視点で，優劣はない，ということも言っていいのかどうか。我々にできることは，文化と呼ばれている現象をひとつひとつ確認していく作業だと思います。ただし，ひとつひとつの文化と呼ばれる現象を確認したからといって，それが「聾文化」である，と我々が決めるという話になるかどうか，それが「文化」だと言えるか，となると，それは難しい主題です。けれども，そうではなくて，「聾文化」と呼ばれているところのもの，そういってしまうといかにも構築主義的な言い方なのですけれども，「聾文化」というものがどのように言語的に構築されているか，ということはできるだろう。その一つ一つの現象をとらえていくためには，

何が難しいか，という話をこれからしていくことになります。結論から先にいえば，「手話がわかんなきゃどうしようもないんじゃない」というつまらないオチになりますが。

◎聾者の条件

さっそく，「ろう文化宣言」を利用させてもらいたいと思います。「聾」とは誰をさすのかについての定義の問題です。「ろう文化宣言」では，言語使用者として聾を定義しました。これに対して，「そうはいっても『聾』には障害という意味が含まれているのではないか」という批判もあります。私の考えとしては，生理学的に聾に聴覚障害があるのかどうかという実在論的な問題はともかく，「聞こえないという体験」は聾であることの構成要素になっているというふうに考えています。「ろう文化宣言」では，聴覚障害の有無や程度は持ち出されていません。実際聾者に聞いても，「聾者にとって，聴力の障害が，重いか軽いかなんてのはどうでもいいんだ」と言います。で，何が問題なのかというと，手話がネイティブであるかどうか，手話の流暢さにかかっているわけです。では，全く聴覚障害の有無が問題にならないのであれば，聴者でも聾者になれるのか，という疑問が持ち上がってきます。より具体的に言いますと，両親が聾者である聴者というのがいます。CODA（コーダ，Children of Deaf Adults）といいます。彼らの中には，聾者並に手話ができる人がいます。その彼らの存在はどうなるのか。聾者を聴力によらずにあくまで言語的・文化的に定義するということであれば，聴者も聾者になりうるのでしょうか。これに対して聾者は，積極的に肯定するとか否定するとかいうことよりは，そもそもそう言うこと自体，想定の対象になっていないといった様子なのです。

その一方，聾者が聾者同士で語り合う中で，聞こえないという体験はよく語られる訳です。とは言っても，それはとかく聴者の間で想像されがちな，「聞こえないという体験＝苦労話」とは違い，日常の一コマとしてあっさりと語られたりします。中にはそれだけでなく，聞こえないことを通じて聴者から受けた差別的な経験について語られることもあります。そうした「聞こ

えないという体験」については，手話ができるかどうかとは関係がないわけですから，難聴者でも共有体験はあるわけです。逆に，聴者であれば，どんなに手話がネイティブ並であっても，「聞こえないという体験」はできません。生理学的な意味で実際に聞こえないのかどうかが「聾」の構成要素になっていないとしても，「聞こえないという体験」について語りうる言葉をもっているかどうかは，「聾」の構成要素になっているのではないかと私は考えています。障害というフィジカルなファクターが，「聾」の文化的定義から切り離せないのではなく，「聞こえない」ということの共有体験が可能かどうかは非常に社会的，文化的であり，それはやはり「聾」の文化的定義の前提条件になっているように思います。

この『ろう文化』特集（『現代思想』）でも，木村さんと長谷川さんの対談で，「手話ができない聞こえない人を排除してはいけない」といった議論があります。でも，そのような，どうすべきかという話は，私はいっさい論ずるつもりはありません。そうではなくて，どういう方法で彼らは実際聾をみているかという話です。そういった意味で，『ろう文化宣言』の定義は不十分ではないかと思っています。聾者が，耳が聞こえないけれども手話ができない人のことを他者に語るときに，「彼は聾だけど手話はできない」という言い方がなされます。けれども，CODAのことを，「彼は聾だけど，聞こえる」とは絶対に言わないわけです。それを言うならば，「彼は聾者並に手話ができるけれども，聞こえる」となるでしょう。あくまで「聾者並」であり，聾者ではないわけです。要は，聾者は耳が聞こえない，ということはいまさら語るまでもなく当たり前という話なのです。CODAはどうかというと，それは，聞こえると言うことがわかるまでは「聾者かな？」ということだけども，聴者であるとわかった後は，聾者ではなくなるということです。

「聾」の定義が言語的な定義にシフトしたことによって，聴者の参入というのは比較的容易になるのではないか，という期待も起きるかもしれません。つまり，手話がうまくなることによって，聾者に近づけるんじゃないか，と。けれども，どこまで近づいていっても「聴者」は「聴者」であることにはかわりはなくて，「聾者」であるための「前提以前の前提」という意味で，

聴者は当然，聾者の外にいるのです。そういうわけで私たちは聾者の外の人間です。ですから，外の人間として聾文化というものを理解するとはどういうことかという話になっていきたいと思うし，このシンポジウムのテーマ自体がそうだと思います。

◎聴者の行う聾文化研究の困難：手話言語学の場合

実際に聴者が行った聾文化研究をいくつか取り上げたいと思います。まず，社会学的な話をする前に手話言語学の世界をみていきたいと思います。手話言語学の一応の今の常識としては，聴者であっても研究はできる，という前提に立っています。そして，ネイティブ・チェックをすればいいではないかと。けれども，私はこう思っています。それは，政治的な配慮の上にそうなっているだけではないのか，と。

要はこういうことです。実際に手話言語学をやっている聴者の中で，手話が読みとれない研究者がいるわけです。その中には「偉い人」もいないわけではありません。（その偉い人に配慮するという）政治的な配慮の結果そうなっているだけではないか，と私は思っています。もちろん，手話言語学のうちの，たとえば，すでに書かれたものを分類するだけであるとか，そういうことなら，ある程度はできるかもしれません。

問題は，聴者の眼に有意味なものとして映らないものは，聴者の分析の対象にならないし，発見もされない，ということです。しかしその聴者の目には映らないところこそが，手話言語学の文法を支える一番大事なものだったりするわけです。眉や顎の動きといった，非手指動作です。手話を最初に言語として研究対象とした人にストーキーという人がいます。でも，ストーキーもそのマーカーを見抜けていなかったのではないかと思われるのです。だからこそ，手話の構成要素として，手形，位置，運動といった手の動きに注目したわけです。けれども，手の動きじゃなくて，顎や眉の動きによるマーカーというものによって手話が支えられているということは，手話が読みとれて初めてわかることなのです。

◎聴者の行う聾文化研究の困難：社会学の場合

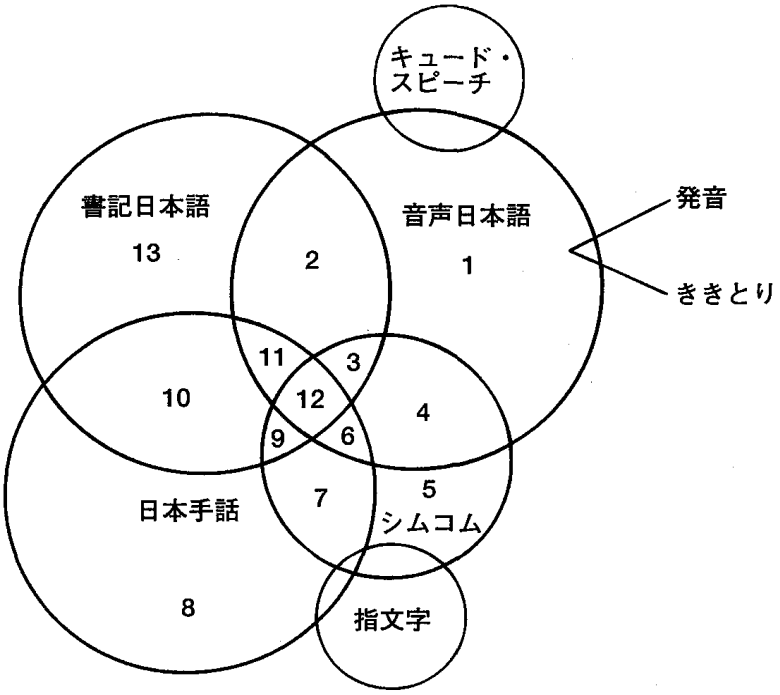
社会学の場合も，やはり同様の問題が生じます。同様というか，言語学よりはその負担は少ないとは思いますが。たとえばインタビューで調査を行ったとき，眉によるマーカーを「文法」として読みとれなくて，「感情」として理解してしまった場合，どうなるか。この人はどうも怒っているようだ，と思ってしまう。そうすると，「興奮して話をした」ものとして記述してしまいます。

また，インタビューは行わず，文書資料に依存して手話の分類を使おうとしたときにどうなるか。さっそく隣の樫田さんに言及するのですが，今日のレジュメでなくて，発表要旨の方に「シムコム批判」への批判が出ているわけです。ただ，ここで「シムコム批判への批判」というものを，「シムコム」というものがなんなのかを読みとれない人がしたときに，陥る危険性があると私は考えます。

「シムコム」と一口に言っても，聴者のシムコムと，聾者のシムコムとでは，質が違うのです。聞こえない人がやるシムコムというのは，聾者にとってあんまり疲れるものではないのです。一方，聞こえる人が声を出しながら手話をすると，声に頼ってしまうために，手話に必要なものがぼろぼろとこぼれていくという現象が実際あるわけです。樫田さんは，シムコムを「対等な一つの言語として見なせるはずの言語」と言っている。けれども，聴者のそれは，音声も聞こえてはじめて「対等な一つの言語」として成立するものです。逆にそれは，音声が消えている聾者にとっては対等なものになり得ないわけです。一方，聾者が使用するシムコムは，音情報がなくても成立します。日本語対応手話にしながらも，視覚的にわかりやすい。そこの区別が手話が読みとれない聴者であればできない，ということです。

あるいは，同じ現象は，現代思想の『ろう文化』特集号にある，上農さんの論文にもあると思うんです。今日配布したレジュメの最後の頁に追加した，ベン図（次頁の図１参照）です。

キュード・スピーチというのは，教育方法として提唱されたもので，50音を手と口形で表すものです。母音は口形で，子音の部分を手で表します。指




1．音声日本語（音声で話せるが，文字の読み書きはできない）
2．音声日本語＋書記日本語（音声で話せて，読み書きが出来る）
3．音声日本語＋書記日本語＋シムコム（音声で話せて，読み書きは出来，シムコムも使う）
4．音声日本語＋シムコム（話せて，シムコムも使うが，読み書きが出来ない）
5．シムコム（シムコムは使うが，音声だけの会話と読み書きは出来ない）
6．音声日本語＋シムコム・日本手話（話せて，シムコムも使うが，読み書きは出来ない。日本手話は使う）
7．シムコム・日本手話（シムコムも日本手話も使うが，読み書きは出来ない）
8．日本手話（日本手話を使うが，読み書きは出来ない）
9．日本手話・シムコム＋書記日本語(日本手話を使うがシムコムも出来るし,読み書きも出来る。ただ，音声での会話は出来ない)
10．日本手話・書記日本語（日本手話を使うが，読み書きは出来る）
11．音声日本語＋書記日本語・日本手話(音声で話せるし，読み書きも出来る。日本手話も使える)
12．音声日本語＋書記日本語＋シムコム・日本手話（音声での会話，読み書き，シムコム，日本手話，すべて出来る）
13．書記日本語（読み書きは出来るが，音声での会話は出来ないし，手話も出来ない）

●それぞれのパターンに具体的状況が対応しているが，その説明，分析はここでは省略する。まずは，組み合わせの状態を示した。

それぞれの状況内での，使用者に対する各システムの支配力の関係（第一言語か第二言語）には，個別差がある。また，当然，システム自体の密度（質のレベル）にも相対性がある。

○「ろう者」の定義問題に関連して

現実に流通している一般的な使われ方では，シムコムと日本手話の円全域（3～12)，場合によっては，ろう学校で口話法教育を受けたろう者（1，2）をも含めた状況（最大適用範囲）が考えられている。それに対し，木村晴美氏たちの主張は，日本手話の円（6～12）の状況にある者のみ（それも日本手話を母語＝第一言語にする場合）にのみ限定する。

**図1　各コミュニケーション・システムの使用状況〔上農正剛：1996，55〕**

文字は１つ１つが50音に対応しています。50音の数だけ指文字が存在します。キュードスピーチや指文字による指導法で教わった聾児が実際にいるわけですけれども，問題は，聾児同士で話すときには，非手話的なマーカーがいっぱい使われているわけです。ですから，キュード・スピーチも指文字も，日本語の一部に入るよりは，日本手話の一部といえるようなものですし，そうまでいわなくても，少なくともキュード・スピーチは単独では存在しないものであると思います。そういう実際の行為に現れる現象を見抜けるかどうかによって，分類の仕方が変わってくるだろうと思うわけです。

◎ましこ［1996］，斉藤［1999］について

ここで，ましこさんと，斉藤さんの二人の例を出したいと思います。ましこさんは，インタビューをちょっと加えながら，聾文化について記述をしたわけです。とりあえず，ひとつ問題を指摘したいのは，インタビューという状況です。これは一対一なんですね。する側は聴者，される側は，聾者です。その方法というのは，内の人が，外の人に向かってはなす話し方を越えていない，ということです。タテマエの話になるわけです。そのときどういうことが起こるかというと，相手の発現が政治的配慮に基づいた発言なのかどうなのかということを見ぬくことができないのです。

そこに対して，斉藤さんは，フィールド・ワークで良くある方法として，自分が空気になるぐらいよく参加するという方法をとりました。その場に同席して，「あの人いつもいる」，ということになる。手話はできないけれども，いろいろ本音を話してあげよう，という位まで近づいて本音を聞くという努力をして，質の高い記述をした，と思うんです。けれども，それでもやはり，それが政治的配慮に基づいた発言をしたかどうかの判断をする方法がないということにはかわりありません。うがった見方をすれば，マスメディアを動かすことができる立場にいる斉藤さんというのを，聾者が意識して，これは強調して話しておこう，これは言わずにおこう，と政治的に配慮している可能性は否定できない。そうだったというつもりはありませんが，問題は，そうであったか否かを判断する方法がないということです。それをしようと思

ったら，聾者同士がしゃべっているのを，自分は参与しないで，それを読み取る位の力がなければならない。そこで話されている語りと，外の人間に対して話す語りとの，差が見分けられてはじめて，外の人に話すときにはこういう話をするけれども，内の人同士で話すときにはこう話す，ということがわかるわけですよね。

◎まとめ

さいごに，すでに話したことをまとめます。これまでの聾に関する研究というのは，教育学や心理学でも，言語学でも，手話がわからない聴者であっても研究ができる，そういうスタンスで行われてきました。そこには政治的な配慮が関っていることが否めません。社会学者も，聾に関心があるかどうかに関わりなく，ほとんど全員が手話はできない。そのときに，聾文化という現象がある，これはおもしろそうだぞと，おもって，興味を持つ人がいるわけです。その時，その人がどのようなスタンスを取っていくのかということです。そこで，「手話はできなくても，聾の研究はできる」というスタンスを取るのかどうか。そうしたところで作られた論文で，私自身が，これは気付かなかった，というような発見をさせられた論文というのは，未だに出会っていません。ましていわんや聾の人が読んだときに，どう思うかといえば，「私たちの言うことがわかってくれた」「紹介してくれた」という感想にとどまっているわけです。聾者が伝えたい話を，聴者の人が代わりに話してくれた，という話なのです。それはそれで聾者にとっては嬉しい話かもしれません。しかしはたして社会学者の役割は「紹介」するだけでいいのかどうか，です。

行為者自身が見抜けない現象まで発見するということが，どれだけできているのか。ましこさんや斉藤さんのことは，私が聞いた範囲では，聾者にとっては「紹介してくれてありがとう」という感想ではないかと思います。一方，これまでの聾に関する研究，教育学者や心理学者のそれというのは，そういう次元ではなかった。聾者にとっては腹立たしいものだったりするわけですね。そういう意味で，私自身は，最低限，聾者に確認できるぐらいの手

話能力がないと，そもそも研究ができないと思っています。もちろんそれは最低限の必要条件であって十分条件ではないでしょう。聾者が聾者同士で話している際に，「わかんないからもう一度言って」とかいう話を入れることなく，その場の話が読みとれるようにならなければ，内なる語りを知ることはできないでしょう。さらに手話言語学であれば，会話として意味が理解できるだけでなく，それを形態素レベルに分解できる能力が求められるでしょう。社会学的研究の場合は，言語学ほどの厳しいスキルではないにしても，それなりには高い手話のスキルが必要だということになります。そういう意味で，「聴者による聾研究は，不可能ではないが困難性を伴う」ということを指摘して，終わりたいと思います。

**岡田**：ありがとうございました。ちょうど4時25分ということで。時間通りです。いま，金澤先生からは，手話を理解できない聴者が「ろう文化」を理解することの困難性を指摘する，という側面からご報告を頂いたわけです。続きまして，樫田先生から，「『ろう文化』研究とエスノメソドロジー—当事者主義を越えて—」というタイトル，題目で，ご報告を頂きたいと思います。樫田先生お願いします。

## 3　樫田報告：「ろう文化」研究とエスノメソドロジー —— 当事者主義を越えて ——

**樫田**：

◎報告の方針変更

徳島大学の樫田ともうします。お配りしている，レジュメに従ってやらない，という決心を，さっきから固めています。なぜなら，次の二つの問題について，議論を集中した方がいいからだ，というふうに考えるからです。それは，「理解」ということと「文化」ということです。理解ということと，文化ということについて，エスノメソドロジーの立場からの主張を，板書（次頁の図2参照）させていただいて，その後，お配りしていますレジュメのローマ数字Ⅲの部分［エスノメソドロジー的議論はどのように建てられなければな

**図２：樫田の主張（板書した内容）**

主張１＝「理解」は，「理解の理解」をとして「理解」可能である。
主張２＝「文化」　　は，達成である。　vs.　金澤氏
（“手話”，“シムコム”）　　上農氏

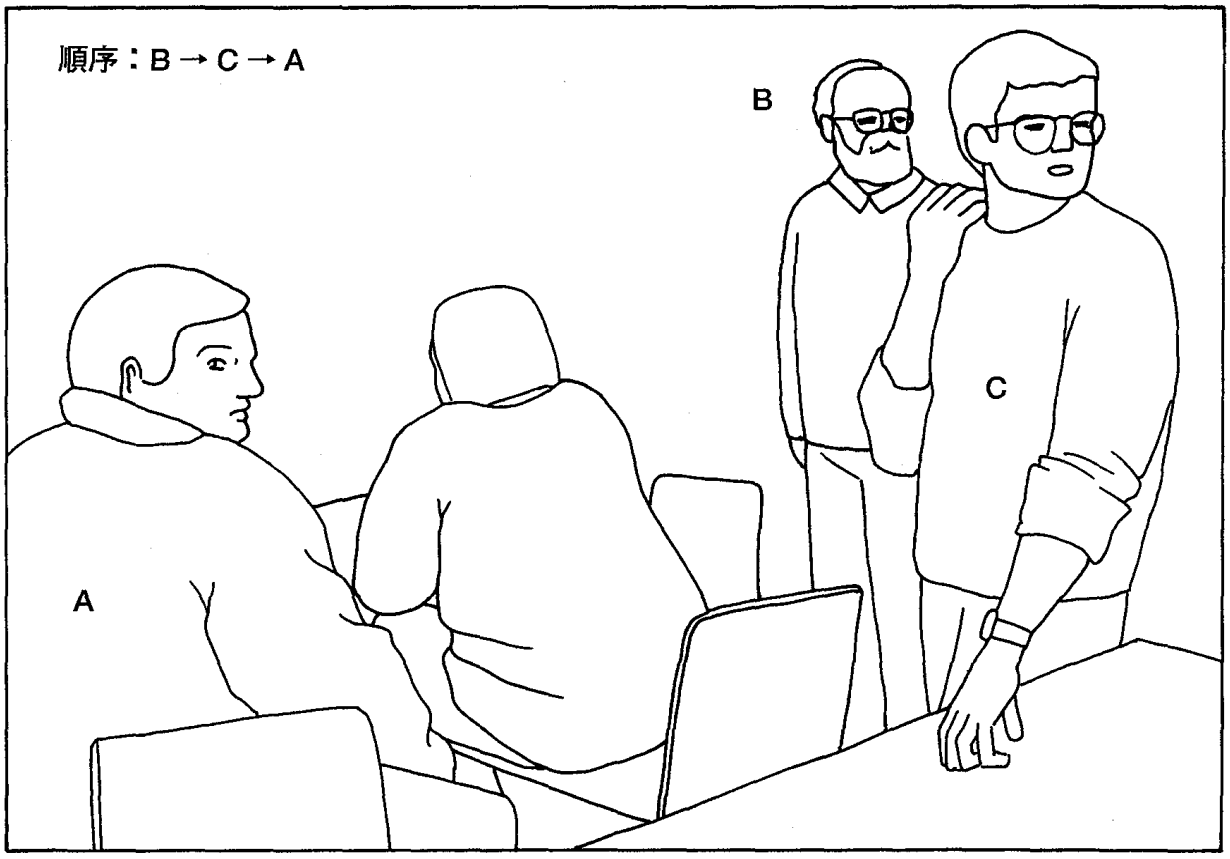



**図３：ソーシャル・リフレクションの図（McIlvenny〔1995：133〕を一部改変）**

ソーシャル・リフレクションとは，「直接見ることのできない関連した行動を，そのときに見ることのできる他者の行為をモニターすることで見るということ」である。
視覚には，視界の範囲（前方，およそ170度程度）しかみることができない，という制限があるが，ひとは場面の性格を理解している場合には，社会的に場面を共有している他者を媒介にして，自分の視覚の範囲外の出来事も知ることができる。図はその例である。ホールにいた３人のうち，Bがまず振り返り，そしてCが振り返り，Cを見たAが振り返ったところである。〔樫田，2000：37f.〕も参照せよ。

らないか](26頁の図６）を扱って終わっていく，それが，議論を集中させていくのによい，と考えましたので，どうぞよろしくお願いします。

◎「理解」と「文化」について

次の二つのことだけいって，レジュメに戻ろうと思います。一つはですね，「理解」は，「理解の理解」をとうして「理解」可能である，という話です。二つ目は，「文化」は達成である，という話です（23頁図２）。なぜ，こんなことをいっているかというと，このようにいうと，金澤さんや上農さんいっていることと，私の言っていることが違う，ということがはっきりするからです。レジュメに，「ソーシャル・リフレクション」(23頁の図３）と「カスケーディング」(25頁の図４）ということが，書いてあります。［ろう文化に対しての］理解ということが，マッキーブニーというエスノメソドロジストによって，どのようになされたか，というと，それは，内省を通してではなく，ビデオ分析を通して，なされたわけです。それは，ここの絵（23頁の図３）にありますように，話をしている人に反応を最初にしたBさんが，それをみて，反応したCさんによって，後からフォローされまして，それを見ていたAさんが，注目すべきものが背後にある，という流れに沿う形で，ABCの三人ともが後ろをむく，ということが起きているという分析で，行われています。つまり，こういうことです（25頁の図５参照)。後ろを注目するという事柄が，声によって，直接，Aさんに伝わったわけではなく，Bさんや Cさんという人間が，鏡（ミラー＝リフレクター）のようになって，Aさんに伝わったということが，「ソーシャル・リフレクション」の中身です。このようにエスノメソドロジーでは理解を理解しているという話が，図２の主張１の話です。主張２の話は，文化が達成である，という話です。市田さんが，ろう者文化について論じている文章［市田・樫田，2000：76f.]がありますが，市田さんは，ろう者の文化を，『ろう文化宣言』のときと同じですが，ろう者が言語を持つこと，と結びつけて，以下のように語っています。

（「彼らが日本語とは異なる言語＝手話をもつということは，彼ら独自の文化をもつということでもあります。そういう視点から，ろう者という存在を見つめ直すことの可能性については，これまでの話でだいぶわかっていただけたと思います。ろう者は直接的な表現を好み，遠

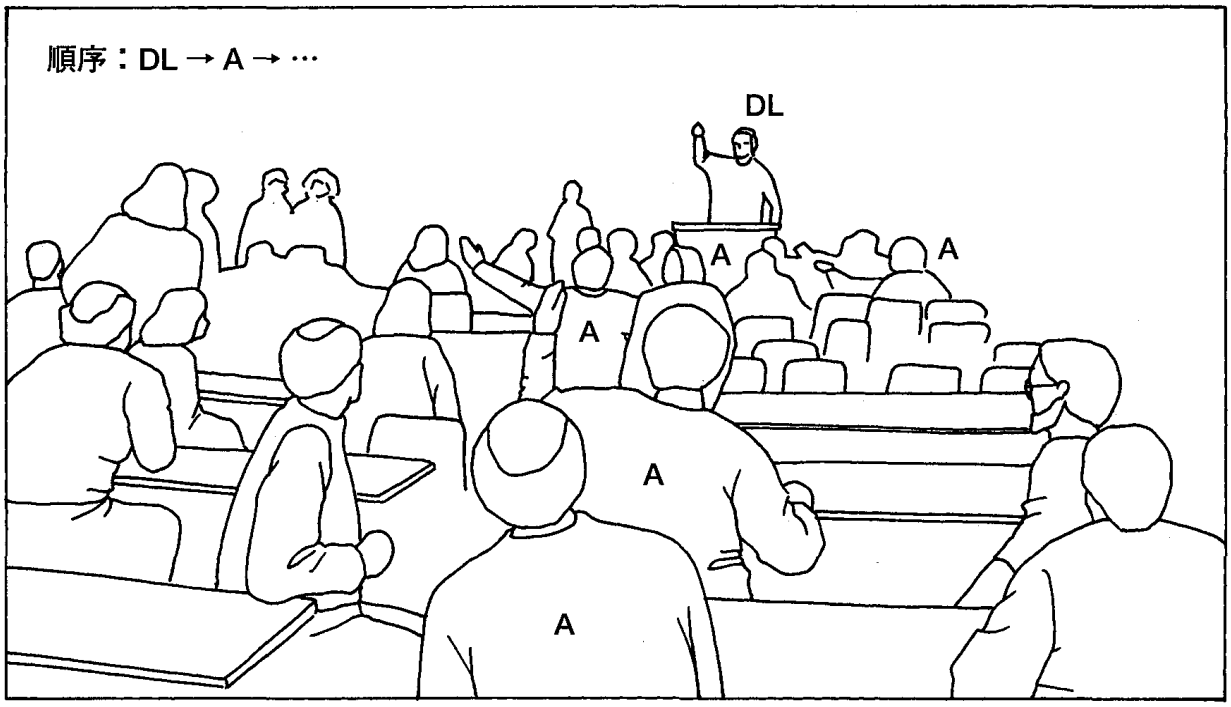



**図４：カスケーディングの図（McIlvenny〔1995：133〕を一部改変）**

カスケーディングとは，滝のことであるが，デフカルチャーに関する用語としては，「理解を達成した集団から，理解を達成していない集団への，情報の移行においてなされる伝搬，または連鎖反応（chain-react）などの諸活動」の全体，を意味する。
カスケーディングはソーシャル・リフレクションと並んで，視覚コミュニケーションの持つ，アクセス範囲が制限されているという特徴，それゆえ，コミュニケーション時に，お互いにお互いを視野の範囲にとどめ置かなければならないという条件(「他者排除的相互拘束（mutual exclusivity constraints)」)に基づいて生じる現象である。
図はその例である。デフリーダー(DL)が，解散しかけたメンバーに，言い忘れたことを伝えようとして手を振り，そのことに気づいた中央部(A)のメンバーが，まだ気づいていないメンバーに，自分たちも手を振って，そのことを伝えようとしている場面である。
〔樫田，2000：38f.〕にさらに詳しい解説がある。参照せよ。

**図５：レジュメからの抜粋（樫田のレジュメのⅡより）**

……以下は，レジュメからの抜粋……

**Ⅱ．マッキーブニーはみずからの研究を，どのように正当化しているか**

※０）マッキーブニーの主張はどのようなものか

①「ソーシャル・リフレクション（人間鏡経由の理解）」(個人の理解の仕方)
「直接見ることのできない関連した行動を，そのときに見ることのできる」他者の行動をモニターすることで見るということ」〔マッキーブニー，1995：133〕

②「カスケーディング（滝的伝達）」(集団の理解の仕方)」
「理解を達成した集団から，理解を達成していない集団への，情報の移行においてなされる伝搬，または連鎖反応（chain-react）などの諸活動」〔マッキーブニー，1995：133〕

③どちらも，ろう者の条件，すなわち，ろう者が手話を言語としていること＆視覚に頼る言語としての手話を使うということは，「みる／きく」ときに「他者排除的相互拘束」をともなってしまう（背中側の手話はみえない／きこえない）ということ，に基づいて

いる（マッキーブニーの主張）
＋（ここで説明するのはちょっと不適切だけど）
「他者排除的相互拘束」状況下では，「ソーシャル・リフレクション」や「カスケーディング」が有効である，と場面参与者が相互に理解している，という「期待の構造」のもとで，２つの現象は起き，かつ，理解可能なものになっている（樫田らの主張）
……以上は，レジュメからの抜粋……

**図６　レジュメからの抜粋（樫田のレジュメのⅢより）**

……以下は，レジュメからの抜粋……

**Ⅲ．エスノメソドロジー的議論はどのように建てられなければならないか（ランダムに）**

１）エスノメソドロジー的無関心……「ろう文化」の存在論には言及しない
エスノメソドロジー的無関心（道徳的評価に関心をもたないこと）は，「研究者のこころがけ」や「調査の倫理」ではない。
それは「方法論」の宣言である。「道徳的評価」という観点をかっこいれ，すると，見えてくるものが違ってくるというストーリー。
この方法論的立場を延長して，「存在論」に言及しない，という立場の採用を主張できよう。

２）「ろう文化宣言」との関係……事実についての言明，としてではなく，「ろう文化」を可能にする資源であったとして扱う
①わきみち：選択肢群の選択は，選択肢の選択に先行して既になされているが，多くの場合，それこそが問題（出生前診断での障害児の問題）（加藤秀一ら）
②エスノメソドロジー：個別カテゴリーの選択は，カテゴリー対の惹起を効果
例：「女はさあ，やっぱり話が長いんだよね」→「女―男」カテゴリー対
（選択肢群の存在も「達成」として考える点で，大澤らと異なるがあとは同じ）
↓
対比の構造＝カテゴリー対（聴者の世界 vs. ろう者の世界）を示し，参照すべき諸事物のモデル，語り方のモデルを提示したものとして，「ろう文化宣言」を扱うことができる。
（例：「ろう者は，ろう文化宣言の内容を先取りして語っていた」
この語り方自身がろう文化宣言を正当化→ろう者の範囲に関するトートロジー）
……以上は，レジュメからの抜粋……

まわしな表現を嫌います。かれらとつきあっていると，そういう価値観の違いのようなものを感じます。」

〔市田・樫田，2000：76，下線は樫田〕）

ここには，ある「ハイライティング」があります。人間一人がたくさんの属性を持つ中で，手話という言語を使っていることに対しての，焦点付け，があるわけです。で，何にハイライトをかけるか，ということでもって，どのような文化を持っている人として，その人を見なすか，ということが決ま

る，という話が上記の市田さんの主張の構成から見て取れると思います。ここまでの話でいいたいことの前半がおわりました。ローマ数字のⅡまでおわったわけです。

◎エスノメソドロジーの方法

ローマ数字Ⅲのところに行くんですけれども，Ⅲの１)(26頁の図６参照)，つまり，エスノメソドロジー的無関心の話をお話ししますと，エスノメソドロジーは，ろう文化があるともないとも言わない，ろう文化の存在論に言及しない，という風に，まず私たちは立場設定をします。その立場からは，Ⅲの２)(図６参照) ろう文化宣言との関係になりますけれども，『ろう文化宣言』を何か，事実についての言明として，正しいとか，正しくないとか，そういう風に扱うのではなく，ろう文化を可能にする，資源であったとして扱うことになります。理由は以下に述べるとおりです。

すなわち①「わきみち」をとばして，②「エスノメソドロジー」に行きますが (26頁の図６)，ある，個別カテゴリーの選択が，そこで有意味になっているカテゴリー対，カテゴリーペアの惹起を効果するということがあります。たとえば，私が，元気なくここでゆるゆると語っていることをもし，女っぽいと評価するならば，その評価者はここに「女性―男性」カテゴリー対を導入したことになるわけです。次の対比の構造の所では，『ろう文化宣言』は，聴者対ろう者，という対比を示したことによって，参照すべき諸事物のモデルを提示してた，と書きました。このように世界を分節するモデルがあることが，他の人に『ろう文化宣言』と同じようにかたることで，ろう者の世界を示すことができるのだ，という力を与えました。そのことを「資源としての『ろう文化宣言』」と呼んでいます。たとえば，「ろう者は，『ろう文化宣言』の内容を先取りして語っていた」という主張がありますが，この語り方で正当化される，『ろう文化宣言』自身がじつは自らの正当性の根拠となる「ろう者」を定義していることに注目しましょう。この語り方はその後広く使われるようになってきているのではないでしょうか。「ろう者はろう文化を持つ」という『ろう文化宣言』の内容を前もって語っていたものが，ろ

う文化を持つものとしての「ろう者」である，という形で『ろう文化宣言』の正当化をすることは論理的には，トートロジーにすぎませんが，それを「無根拠」として非難するのではなく，そのようにして，ろう者というカテゴリーが，社会的に今あるような形をもったものとして成立してきたのだと，言いたいわけです。

しばらく議論を続けます。つぎは，人類学批判と理解に対する樫田提案との関係です。人類学に対して，それは，帝国主義諸国からみた植民地・開発途上国，というものを，カテゴリー的に作り上げる振る舞いであった，という非難があると思います。たしかに，理解する，ということは，支配する，ということとおなじだ，ということは言えると思います。けれども，理解そのものが不当なのでしょうか。どのカテゴリーに属す人間も支配を受けています。その中で「聴覚障害者」として支配される状態より「ろう者」として理解される方がましだという選択はあってよいように思います。

さいごに，「『ろう文化宣言』は言語帝国主義として批難されるべきか」という問題について考えようと思います。『ろう文化宣言』は詰まるところ，たしかに言語に基づいて民族があり，言語に基づいて文化があるという「言語—民族—文化」の三位一体説を取っているように思われます。このことを不当だ，ということは簡単です(〔新井，1996〕，〔ましこ，1996〕参照)。三位一体でないやり方で，「言語—民族—文化」を考える根拠になると思われる事例はたくさんあります。たとえば，方言と一つの言語の区別，というものは，簡単には付けることができません。日本語という，一つの言語の中でもご存じのように，青森方言と鹿児島方言では，通じませんし，別の言語と言われている，オランダ語とベルギーの言葉は通じたりする，という事実があって，言語と方言は，このように「それらは一つの言語として理解されている」，というトートロジカルな定義によって，一つの言語にくくられたり，くくられなかったりしている訳です。日本についてつづけて言うならば，沖縄について，そこでの言語を「日本語」とは別の言語だ，と言いたてることも，日本語の方言だと言いたてることも，どちらも同じ位十分に可能である，と言っているわけです。あるいは，民族というものを考えてみたときに，そこ

にすんでいるということによる統一性も，言語の統一性も，文化的な統一性も，この一つだ，という形では，定めることができません。にもかかわらず，私たちは，三位一体的に考えることができます。周辺部（CODA 等）の処理がどんなにやっかいであろうと，ろう者は日本手話を使い，ろう文化を持つと考えることができます。その際，三位一体的に考えることも，考えないこともいずれも達成として扱う，というのが，エスノメソドロジーの立場と言ってよいと思います。三位一体でなくも考え得るから，三位一体的に考えることに正当性はない，とは主張しません。問題は，どのようにそれが達成されているのか，ということなわけです。

そうしますと，ろう文化をかたるべき，語り方というのは，いかにそれが，ろう文化として達成されているか，ということを確かめていく作業になります。ろう者内部での，語りの厚み，たとえば，我々はろう者である，ということに付随するたくさんの，語り。それから，マッキーブニーは，ろう文化の応援者として振る舞っているわけですけれども，マッキーブニーによる，事実的な研究による裏付け，あるいは，市田さんの先ほどのろう文化についての講演内容［市田・樫田，2000］のような，啓蒙家による啓蒙，これらのことの全体的な組み合わせとして，ろう文化が達成されている，と考えることができるように，思われます。

再度，市田さんの引用の部分を読みます。

> （「彼らが日本語とは異なる言語＝手話をもつということは，彼ら独自の文化をもつということでもあります。そういう視点から，ろう者という存在を見つめ直すことの可能性については，これまでの話でだいぶわかっていただけたと思います。ろう者は直接的な表現を好み，遠まわしな表現を嫌います。かれらとつきあっていると，そういう価値観の違いのようなものを感じます。」
>
> 〔市田・樫田，2000：76，下線は樫田〕）

この最初の下線の部分が，ハイライティングとして，先ほど言及した部分

です。そういう視点から，ろう者という存在を見つめ直すことの可能性については，これまでの話でだいぶわかっていただけたと思います。後半の下線部「ろう者は，直接的な表現を好み……」の部分の市田さんによる記述そのものが，ろう文化を成り立たせる資源であると，みなすことができる，と言っているわけです。あるいは，ろう文化について，このシンポジウムが，それをテーマとして扱っていること，それは，聴者世界でのろう文化の（研究対象としての）承認ということを意味していると思いますが，それ自身が，ろう文化の達成の一部をなしているように，思われます。

◎まとめ

以上で，言おうとしたことの主の部分を終わらせたわけです。復習しますと，金澤さんの話の中で，「聞こえないという経験が，ろう文化を語るときの中核である」という，話がありました。その部分は，「ろう文化」研究のエスノメソドロジー的やり方においては，「聞こえないという経験へのハイライティング」として，研究できる対象のように思われます。上農先生は，金澤さんのレジュメの末尾に資料として載っている図表（もともとは，『現代思想』掲載の図１，19頁）において，日本語と，シムコムと，日本手話を対比させていますが，このようなカテゴリー群の導入，そのこと自身が，「日本手話」を主として用いる人たちとしての「ろう者」を可能にし，ろう文化に裏付けを与えている，といえるように思われます。

以上の話を，私の前の発表の金澤さんと，私の後にコメントをしてくれます上農さんの両方に対する，樫田からの言及として，発表を基本的には終えようと思っています。それで，言いたいことを，さいごにまとめておこうと思います。

金澤さんの話は，結局の所，当事者主義的にろう文化を研究すべきだ，ということになっていたように思われます。あるいは，上農先生の分析は，20世紀末の日本において，知識人が得た知識に基づいて，ろう者の世界を，諸言語のカテゴリー類型との関係に基づいて整理した図式になっているように思われます。この上農先生の手によって整理された世界を，事実として扱う

のではなく，言いたいことを言いますが，それらの問題を，エスノメソドロジー的にずらした形で考えていこう，という立場を主張しました。多くの場合には，言語があるから，という形で，因果論的に根拠づけられていますろう文化を，文化達成のエスノメソドロジー研究，に開いていく方向，そのやり方としての，カテゴリー分析や，ビデオ分析に可能性がある，という主張をしました。

◎マッキーブニーへの不満

じつは，マッキーブニーのやり方には，不足・不満があります。その点を今回はここまででは触れなかった訳ですけれども，さいごに，ひとことだけいっておくならば，マッキーブニーは，このソーシャル・リフレクションやカスケーディング，という現象を，ろう者世界に固有な現象それ自身として扱っています。けれども，見た目の現象それ自身としては，それは，聴者の世界にも，あると見えることです。私たちは，手話通訳を横でやってもらっているので，くりかえしさっきから起きているようなことですけれども，自分の，視界に入っている人の振る舞いを見て，その人が何を見ているかということを通して，自分の状態（自分のすべきこと，話のペースをあげるべきか，おとすべきか）を理解していくことができます。ソーシャル・リフレクションを，聴者もすることができるわけです。マッキーブニーのような水準で探求したときには，ろう，というカテゴリーに，ある技術（ソーシャル・リフレクション等）を本質主義的に結びつけてしまう，そういう不適切な探求になる危険性があります。たとえば，「ろう者は，ソーシャル・リフレクションをよく使う」,「ろう者は，カスケーディングをよく使う」,「それがろう者の特徴だ」というような研究になってしまいかねないわけですが，同じ事態を，「理解の理解」を通して，「理解」するというやり方を徹底して，読み直す中で，エスノメソドロジー的研究が洗練されていくのだろう，ということを言いたく思います。

まとめが長くなりましたが，これで終わります。

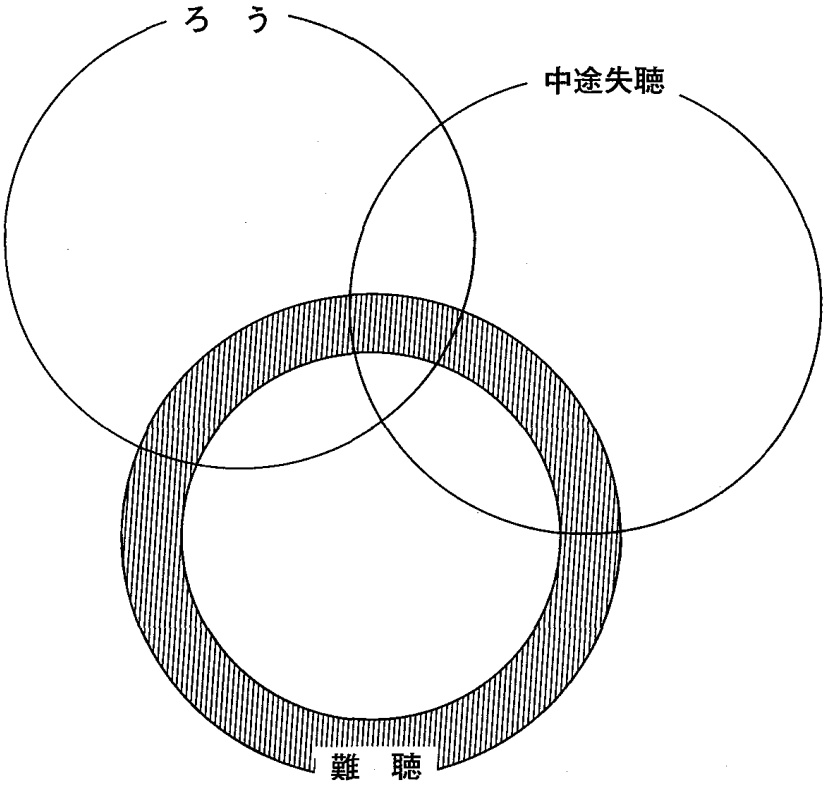



**図7：**

・狭義（限定）定義←木村・市田
・広義（拡散）定義←長谷川

**岡田**：これまた，ぴったり25分で時間通りです。樫田先生の発表の要約のようなことをさせていただきますと，金澤先生が，「研究の困難」に主題をおかれたのに対して，樫田先生からは，社会学的に行為論の文脈からご発言をいただいたように思います。そのうえで，カスケーディングのような目に見える何かがあるのだから，「ろう文化」についての研究はできるのではないか，ということをいわれ，もうひとつは，研究をしていくことが，それ自身「ろう文化」をつくりあげることになる，「ろう文化」は現在進行形で達成されつつある事態であるというご指摘もありました。聴者による「ろう文化」研究が「ろう文化」の構成要素である，という複雑な事態について，指摘いただいたように思います。おふた方のご報告について，フロアからご質問，ご議論などがあると思います。ですがまず，当初のタイムテーブルにしたがって，上農先生から，コメントを頂きたく思います。樫田報告には上農先生へのご批判もありましたので，先生からは約20分コメントを頂いて，その後，

休憩に入ります。さらにその後，フロアのみなさまからのご意見を頂きたいと思います。では，上農先生どうぞ。

**上農：**

九州保健福祉大学の上農と申します。よろしくお願いします。今，金澤先生と樫田先生が規定の時間どおりぴったり終わられて，大変感動したのですが，私は多分そのようにいかないと思いますので，できるだけ大切なことを先に言おうと思います。まずここに三つの円を書きました（32頁，図７）。ベン図が好きでしようがないという訳ではないのですが，これを使って私が大事だと考えることをお話しようと思います。

◎金澤先生の主張のポイント

先程，金澤先生の発表の時，さりげない一言がありましたが，今日の話で金澤先生がおっしゃりたいことを再度はっきり言うならば，手話，特に日本手話が分からない人はろう文化に対する発言をする資格はないんだということではないかと思います。はっきりそう言われたと思うんですね。非常に優しい人ですから，あからさまには言われなかったと思いますが。そのことについて，私の見解も付け加えながらお話をします。樫田先生がエスノ的な考え方で，一つの研究方法を示されたと思います。樫田先生のお言葉ですと，なぜエスノ的な考え方を提示するかというと，金澤先生や上農のいう「理解」という考え方と違う視点があるということを示してみたいということだろうと思います。ただし，私自身が「理解」ということをどういう風に考えているかを提示していなかったことも含め，相互に「理解」という考え方についての確認をしていなかったため，どうしてそういうことを言われたかということを十分に理解できない点がありました。

◎ろう文化の独自性

「理解」するということをどういうものとして考えるかについては様々なアプローチがあると思います。エスノもそのひとつです。金澤先生がお出しに

なった考えを当事者主義だろうと最後に樫田先生はおっしゃたのですが，そういう文脈でいうならば，私の考え方もおそらく当事者主義だろうと思います。どういうことかというと，「ろう文化」というものが一体どういうものか，具体的に「ろう文化」の中身，内容が何かということを考える場合，私は一つの仮説として「ろう文化」というものは独自のものとしてあると思っています。あると思っていますが，それなら私がその内容を全部きちんと理解しているかというと，そうではありません。私はろう文化の中核である日本手話が理解できていません。日本手話は99％読みとれません。ですから当然言語的理解を通して，ろう文化の内実を理解しているという意味ではありません。時間がないので詳しい話は出来ませんが，それでも，ろう文化は確かにあると考える立場です。

◎三つのグループ―ろう・難聴・中途失聴

黒板に書いた図をみてください（32頁，図７）。円で示した三つの集団は互いをどのように区別しているのかというと，ある意味で，そこにはハッキリした区分けはなくて，互いに乗り入れているグレーゾーンがあるといえます。具体的に言えば，ある人の手話が日本手話で，そのネイティブ度が非常に高い人もいれば，そのネイティブの聾者から見た場合，「あの人の手話はちょっとね」と言われるような人も，その大きな集団の中にいます。しかし，一方で，ろう者集団の領域の中には，一つのコア（中核的）な場所として，それが非常に濃くなった「ろう文化」と呼ぶしかない空間があるのも事実だろうと思います。そこで，もし，この濃い部分の「ろう文化」を研究するというならば，日本手話ができなければ，研究は成立しないと私も思います。それは至極当然のことでしょう。ですから，その点については，金澤先生が主張されている，ろう文化を研究するなら日本手話をある一定のレベルで理解，習得していることが絶対条件になるという意見には何ら反論はありません。このことをまずはっきり申し上げておきます。

ただし，金澤先生のお話の中には，私の書いた「現代思想」論文に対する批判があったわけですから，それについて，お話をしておきます。まず，「ろ

う文化」というタイトルで，この雑誌は編集されたわけです。そのとき，編集の方から言われた事がありました。「難聴と中途失聴のことはあまり出さないでほしい。今回は『ろう文化』や『ろう者』に光を当てたいので，難聴とか中途失聴の問題についての発言があると話がぼやけてしまうので」ということでした。しかし，私は「ろう文化」とか「ろう者」と呼ばれている人たちに関する何らかの主張がなされる場合，その主張の意味を私たち聴者が少しでもきちんとわかろうと思うならば，難聴や中途失聴と呼ばれている人たちの状況への理解も同時になければ，問題の本質的意味をはっきり掴めないのではないかと考えていたので，そのような方向で原稿を書きました。難聴児（者），あるいは中途失聴児（者）と呼ばれる人たちがどのような教育を受けて来たか，又，誰が，どういう理由でそういう教育をしたのか。そして難聴者や中途失聴者はろう者からはどのように見られてきたか。そのような状況と相互関係をしっかり把握しない限り，全体像とそれぞれの個別状況の意味は「理解」できないのではないかというのが私の基本的な立場です。

この考えに従って，前述の論文では一応三つのグループがあるという形で書きました。それから，金澤先生から私の論文に対する意見がでている訳ですが,私としては少し違うニュアンスで書いたつもりでした。聞こえない人，聴覚障害者と一括して呼ばれている人たちがいる訳ですが，それを敢えてグループに分けるとすれば，一つの区分として，「中途失聴」,「難聴」,「ろう」と分けることが出来る。この見方で，まず全体をとらえたいと考えました。そして，私が書いた論文は，ろう者とろう文化それ自体に対する分析ではありません。そのことも含めて言っておきます。それなら，私はなぜ三つのグループにわざわざ分けたのか。3つに分けたことに対しては，いろいろ批判も受けました。いずれの集団にも属していない者が勝手に他者の集団を分類すること自体，一つの暴力であるというか，さしでがましい越権行為であるという批判です。そのことは十分わかった上で，敢えて一聴者として，「ろう者」の主張，あるいは「ろう文化宣言」的な考え方に必ずしも賛同できない「ろう者」の意見を把握するために，三つにグループ分けしました。グループ分けした事情をさらに詳しく説明すると，まず，各グループの使用する

言語，コミュニケーションがそれなりに違うということがあります。次に大きな問題として，受けた教育の違いということがあります。具体的には，どのような学校で，どのような内容の教育を受けたかということも，かなり違っています。そして，それにともなって達成している生活の仕方もかなり違った面があります。このような現実の状況を踏まえ，三つのグループに分けた訳です。

先程の打ち合わせで，金澤先生が「プラクティカルな議論がいいだろう」とおっしゃったので，私もそれに合わせて話をしますが，私が「現代思想」論文で言いたかったことは，何か積極的な主張だった訳ではありません。まずこのような全体状況があるのではないだろうか。その中で木村さんたちが主張した非常に限定された「ろう」の定義があった訳です。ろう者は日本手話のネイティブでなければならないというような条件です。これが先程述べた「ろう文化」の「濃い部分」の一つです。この主張の意味が，全体の中で，どのような場所に位置するのか，他の領域とどのような関係になるのか。議論のたたき台として，それをまず整理して，提示しておきたかったというのが，あの論文の目的です。もちろん，それが十分に成功しているかどうかはまた別の話ですが。

◎シムコム

それから，金澤先生，樫田先生，お二人のお話の中にシムコムという問題について触れられた部分があったので，その話もしておきます。シムコムはピジン言語であるけれども，それなりの価値を持っているのではないかという御意見を樫田先生が配付資料（発表要旨）に書いておられます。そのことについて，金澤先生から言及があった訳です。私はシムコムについては，価値として，まだ何とも言い切れない状況にいます。その上で言うと，シムコムは先程金澤先生が説明されたように，まず，聴者があらわすシムコムというものがあります。それから難聴というか，かなり「ろう」に近づいてはいるが，「ろう者」ではない聞こえない人たちが使うシムコムというものもある。これは後で金澤先生が詳しく解説してくださるといいのですが，サイレ

ント・シムコムといって，知らない人が見ると日本手話のように見えたりもしますが，実際は日本手話ではなく，声のないシムコムであるものもあります。そのような厳密な違いがあることは一応わかった上で，私はあの論文を書いたつもりです。

◎キュードスピーチ

それから，シムコムに関する問題と別に「キュードスピーチ」とか「指文字」についての話もありました。キュードスピーチが教育指導上，考案されたものであるということは私にも分かってます。ただし，なぜ論文の中でキュードスピーチの問題に触れたのかというと，次のような事情があります。資料として配付されている拙論に添付されたベン図をみてください（19頁，図１）。「キュードスピーチ」は右上に位置しています。そして，それが音声言語の円に交わっています。このことの具体的意味は，本来，キュードスピーチというものは聞こえない子供に音声言語の音韻を視覚的に明確に伝えたり，確認させたりすることで，最終的にはそれを発音させることを目的に作られたシステムです。聞こえない子供が音声言語の発音が明瞭になるに従って，キューの使用は少しずつ取り除かれていき，最後はキューなしでも明瞭な発音が出来るようになる，それがキューを導入した指導法の理想的な到達点です。先程，金澤先生はキュードスピーチは単独では存在しないと思うと言われました。ところが現実には，その目的から逸脱し，それ自体で独立した独自のコミュニケーションのシステムになっている奇妙な事例がある訳です。ベン図でいうと，音声言語の円にかかっていない部分で，正に「単独」に存在している状況です。これはある地方で私が実見した事例です。キュードスピーチだけを使って，母親と子供が二人だけのコミュニケーションをしている。日常会話のすべて，話の全文をキュードスピーチで表し合っていました。その子供は二十歳を過ぎていましたが，そんな状況でした。キュードスピーチは，教育の方法，そして言語指導法として見ても独自の問題を孕んでいます。そのことを示す意味で，あのベン図にキュードスピーチの円も書き加えました。

◎指文字

指文字の問題については，これはろう者が日本手話の中で確かに借用しています。しかし，この「借用」の問題は金澤先生が専門なので，別に議論していただくとして，それとは別の現実的問題として，ろう学校の聞こえる先生たちが，学校の中のコミュニケーション場面で，指文字を様々なレベルで使っている。そのことで，いろいろな問題が生じています。

このような様々な現実の言語状況を，全体として，まず整理して大掴みに把握することも必要ではないでしょうか。その一つ一つのコミュニケーション状況が良いか悪いか，適切かそうでないかという評価，批判は別として，まず事実として，現実にこういうコミュニケーションの形態が様々にあることの整理と確認がいるように思います。その全体状況の中で，日本手話というものが使用される時，どういう有効な意味を持つのか，あるいは逆に，それはどのような意味で対立的なものになってしまうのかということについて考えたいと思い，そのための基礎工事的手続きとして，見取り図としての小論を「現代思想」に書いたつもりです。

◎ろう者と難聴者の「抑圧体験」は同じか

もう一つ，金澤先生が言われたことについて，これからの議論に役に立てばと思い，敢えて触れておきますが，ちょっと気になったことがありました。「ろう文化」というものが仮にあるとした場合，その中身の一つとして，聞こえない人間として聴者から受けてきた抑圧体験というものがあり，変な言い方ですが，そのろう者同志に共有された抑圧体験というものがろう文化を構成する一つのファクターである。このような指摘が金澤先生からありました。そこまでは私もいいと思います。気になるのは，その先です。難聴者においても同じように，その共有経験はあるはずであるという発言です。これと同様の発言が配布資料（レジュメ）にもあります。「聞こえない」という体験について，難聴者はろう者に共感できるが，日本手話ができないので，それをろう者に向かって語ろうとしても出来ないため，言語的に双方向の理解が出来ない。私はこの意見には同意できません。難聴者が受けてきた抑圧

とろう者が受けてきた抑圧は，その意味や状況，関係性，結果的に不利益を被った実質から見て，同じものであると言うのは困難ではないかと思います。類似した面もありますが，かなり異なる点があるのも事実です。何より，（コアな自己規定をする）ろう者自身，このような意見に対し同意するでしょうか，私は甚だ疑問に思います。

◎エリート難聴者の言語資本

例えば，難聴者の中で非常に教育がうまくいった，つまり，聴覚口話法が成功したと言われるような難聴者の場合，日本語の読み書きだけでなく，英語の読み書きに関しても非常に力があります。つまり抑圧を受けながらも，「言語資本」をしっかり手に入れている訳です。このシンポジウムは社会学のシンポだと聞いていますので，皆さんおわかりかと思いますが，言語資本とはピエール・ブルデューが言った概念です。抑圧を受けつつ，難聴児のエリートと言われる一部分の人たちは言語資本を手に入れています。その結果，それが学歴に繋がったり，社会的地位に繋がったり，その他さまざまな利益を手にしています。逆に，ろう者たちはそのような資本をなかなか持つことが出来ません。抑圧と一言で言っても，抑圧の結果，それがどのような能力をももたらしているのか，どういう資源となっているのか，そして，しかしその上でもなお，どのような複雑な苦しみとなっているのか。難聴者の抑圧体験だけを見ても，独自の錯綜した複雑な様相があります。難聴者と呼ばれている人たちにも様々な状況があります。自分が使用するコミュニケーション方法は音声言語に対応したシムコムだけでいいと言う難聴者もいます。しかし，一方で，やはり様々な問題を抱え，難聴者として生きていくのは息苦しい，ろう者として日本手話を身につけて，本来の聞こえない人間としての自分の姿に戻りたいと思う人もいます。ただし，後者の場合，その人たちが難聴児として育てられた結果，身につけた言語資本（日本語や英語のリテラシー能力）が場合によっては，ろう者にとって非常な脅威になります。それ自体がろう者に対する抑圧になる場合すらあります。つまり，言語資本の不均衡という問題です。書記日本語や英語のリテラシーという言語資本を

十分に持っていないろう者は沢山います。しかし，こう言ったからといって，私はろう者の能力の低さを指摘している訳ではありません。この点は決して誤解しないでください。ろう者の書記日本語や英語に対する理解力の低さは，ろう学校の教育の杜撰さ，劣悪さ（手話を否定し，十分なコミュニケーション手段になり得なかった口話法だけに固執してきた姿勢）に起因しています。ろう者の能力の問題ではありません。その点を確認した上で，しかし，現実的にはやはり日本語が十分うまく書けない，読めない。そして，書けない，読めないことでいろんな偏見を持たれ，理不尽な対応や差別を受ける。そういう状況の中に，読み書きの出来る難聴者がろう者となって仲間として入ってこようとする時，ろう者たちはその難聴者をどのように迎えるでしょうか。そういう難しい問題があります。

◎ろう文化の定義―狭義と広義

例えば，ろう文化というものを狭く限定した場合，その狭いコアな世界にこそ入りたいと思う人たちもいる訳です。そのような人たちを当のろう者たちはどのように扱うか。「〈ろう者〉になりたがっている人たち」という微妙な意味を込めた表現で呼んだりします。ただし，そんなことは気にしないで，同じ聞こえない仲間なんだから，「いいよ，いらっしゃい」ということで難聴者を仲間にいれてくれるろう者もいます。しかし現実は必ずしもいつもそうである訳ではありません。ろう文化というものを狭義に定義すると，このような現実の問題が立ち現れてくるということです。「現代思想」にはろう者の木村晴美さんと中途失聴者の長谷川先生という筑波技術短期大学の先生の対談が載っています。読んだ方には分かると思いますが，そこで，長谷川先生が次のような意見を提示されています。ろう者に関する狭義の限定された定義があると，中途失聴者や難聴者との区別が出来てしまう。そのような定義は取っ払った方が良いのではないか。ある種の自己申告制の承認ですね，つまり，私は「ろう者」なんだ，あるいは「ろう者」になりたいと思っていると本人が言う場合は，それを認めるべきではないか。それを他者が，この場合の他者はろう者なのですが，「資格審査」のようなことをするのは

大変おかしいのではないか。このような形で，むしろ広義のろうの定義を求める声も一方である訳です。

◎ろう文化の具体的事例提示の問題

私たちはこういった様々な複雑な問題状況を踏まえて，「ろう文化」あるいは「ろう者」を「理解」するという問題を考えていかなければならないと思います。ろう文化についての私個人の考えは先程言いました。ろう文化はあると私は思います。樫田先生が市田泰弘さんの書かれたお話に触れられていましたが，私も同じような話を市田さんから個人的に聞いたことがあります。それは，謝罪，謝るという社会的行為について，ろうのコミュニティには独自のスタイルがあるという話でした。コミュニケーション論から考えても非常に興味深い話で，印象に残っています。ただし，問題はそのような社会学的，あるいは文化人類学的な「ろう文化が文化であること」の分かり易い明確な事例を出してくれる人がなかなかいないということです。

◎ろう文化に関する深いレベルの研究の可能性

最後に，これも今，提起しておいて後の議論に繋げていただければと思うのですが，金澤先生が最後に言われたのは，研究というものは，人が見抜けないような現象を発見できるような研究でなければならないということでした。多くの聴者が研究と称して提示しているものは，ろう者からすると，自分たちの気持を解説したり，紹介してくれているだけであって，ろう者が「そうか，自分たちの文化にはそのような意味があったのか」と気付かせてくれるような研究にはなっていないという批判でした。社会学や人類学の領域で他者の立場に立った観察報告というものが積み重ねられてきた訳ですが，金澤先生が言われているようなレベルまでの研究を求めるならば，果たして本当に，聴者にそれができるのだろうかという一つの疑問が生じます。であるならば，私の考えでは，そのような研究は，ろう者自身がするべきであると思います。今日，皆さんに是非考えてもらいたいのですが，研究と我々が言う時には，具体的にそれはどういうものとして考えられているのでしょう

か。それは論文という形にして書くということですね。論文は英語で書くか，日本語で書くかです。この具体的な条件を考えると，日本の多くのろう者たちの書記日本語の力がまだとてもそのレベルまではいっていないという問題に再び立ち戻らざるを得なくなります。その力不足である事情については先程述べました。であるならば，問題は，日本語の力（書記日本語の能力）をろう者自身にしっかりつけて，そのことによってろう者たちが自分たちの内なる文化を外へ向かって，日本語の書き文字として伝えていくということがなければ，金澤先生がおっしゃっているような研究を確立していくということは難しいのではないでしょうか。

他にも言いたいことはありますが，時間ですのでこれで終わります。

**岡田**：上農先生，ありがとうございました，皆さん。ご質問などあるかと思いますが，10分間休憩をとりたいと思います。その間に，ご質問をこちらの紙に書いていただければ助かります。10分後に再開したいと思います。再開直後に，ちょっとイレギュラーですが，ご自分の発言が誤解されているかもしれないということで，樫田先生からご発言があります。その後，前半の疑問を私なりにまとめさせていただいたうえで，フロアーの皆さんの意見を含めたしっかりした議論をしていきたいと思います。コメンテーターの上農先生にも最後にまた，コメントをお願いします。

**樫田**：１分で終わります。徳島大学の樫田です。文脈の解説を怠っていたので，それを補おうと思います。なぜろう文化が問題になるかということを，文化を語る権利の配分という問題を最初に語るべきでした。それを補って終わりにします。

そもそも人類学において，人類学研究が何をしているのかが問題になったのは，ヨーロッパの優越文化が一方的な権利者として，発展途上国の文化を語ってしまっていたのじゃないのかという問題があったからです。ところが実は，アジアである日本，アジアであるシンガポール，中国の人が自らの文化を語れば，それで良いということにはならなかった。というのが，その次

の展開です。当事者が自らの文化を語り始めれば終わりかといえば，そうでなく，当事者もまたオリエンタリズムの，西洋と東洋の，２つの対の中で語るしかなかった。実は，優越文化が権利者であった時と同じ構図が当事者の語りの中で発見されたというのが，その次の構図だったように思います。つまりは，カテゴリーの対の外で語ることができなかったという問題があったと思うわけです。そして，ろう文化宣言が辿り着いている位置は，当事者が権利者だというところなのであって，結局のところアジアの人間もヨーロッパとの対比でしか自らを見い出し得なかったという過程と同じプロセスを，後追いするだけじゃないのか。フェミニズムの話でいうならば，男女を一対として考える議論の限界を後追いすることじゃないのか。そういう先取り的な問題提起をしたかっただけなのです。この限界にはエスノメソドロジーによる突破が必要という立場から，私は金澤さんや上農さんに対して，反論しただけなんだということを言って終わりにします。

**金澤**：誤解されているのではないかという立場でその修正ということで話をさせていただきます。

樫田先生が今，書かれたことをちょっと先に使わせていただきます。私が言いたかったことはこういうことです。エスノメソドロジー的に突破をはかる。なるほどそれは構わない。だったら，「やれるもんならやってみろ」ってところでしょうか。挑発的な言い方を敢えてしましたが…。どうやって突破するのか。どうやって達成の仕方をみるんですかということです。つまりはっきり言えば，手話の出来ない樫田さんの立場として，手話が読みとれなくてもエスノメソドロジー的なやり方があるならば，具体的にどうやってやるかということです。私が話していることはあまりにも当たり前のことです。それに25分も使ってもったいないと言われるとそれまでなんですが。先走ってしまいますが，質問の中にもありましたが，それは日本人が他言語の人の研究をする時にその言語を習得するのが必要かどうかについての話と同じです。そんなに当たり前過ぎることを言わなければならないのは，そこがこと手話に関しては当たり前になっていないからです。もちろん私も，そん

な当たり前のことだけで研究論文を書こうとは思っていません。

もう一つ誤解されては困るのですが，私は当事者主義にたって語るつもりは全くないということです。その証拠と言えば変なのですが，最後に上農先生がコメントされたところで，ろう者本人すら気付かない気質というのを，研究者が与えて見つけるということは，研究者の役割だと私は言いました。それは当事者主義とは違います。つまりろう者自身のことはろう者自身がやればいいということではないのです。ろう者だからわかる，ろう者ならばろう者のことがわかるという前提に立たないからこそ社会学的なトレーニングが必要ですし，研究者の視点が必要になると思います。もちろんそれを聾者が行っても構いませんが。上農先生は，そこまでするのは難しくて，それができるのはろう者でなくては無理だと言われました。それについては，そんなことが言える根拠がどこにあるのかと私は思います。先ほどから例に上がっている市田さんは手話言語学を主にされているわけですが，ろう者の気付かない発見をいくつもしています。「こういう風に思ったけれども，そういうことってある？」と聾者に聞くわけです。そうすると「ああ，言われてみれば，そうだった」ということはあるわけです。ご専門の手話言語学についても，頷きや目線といった非手指マーカーがどういう役割をしているか分析して，言われてみればそうだったけれど気付かなかった，という発見をされているわけです。つまり当事者主義で語ることではなくて，あくまで私の言ってることはものすごくシンプルで，達成の仕方をどうやってみるのかということがそれの問題にすぎません。それは誤解されては困ります。

樫田さんが「内省ではなく，データとしてビデオを分析する」というお話をされました。それについてですが，私はエスノに興味はあるけれども，今は構築主義的な立場で研究をしています。樫田さんがビデオ分析するとして，そこには当然手話という言語が分析の対象になってくるでしょう。ビデオに現れた言葉をどうやってトランスクリプトまでもっていくかという，その範囲においては議論がかみ合うと思います。私はあくまで資源としての言語をどうやって見つけるかを問題にしています。見つけ方が不適切であれば，それは聾者の相互行為を分析することなどできません。私は日本手話の

スキルが必要だとは言いましたが，当事者主義とは違う話です。

研究をするという行為自体がろう文化にとり込まれるということは，あって当たり前です。「聾」の定義がどのようにされているかについて，一応，私が一つの話をしました。けれどもそれは当然，可変的なものです。例えば木村さん達が「ろう文化宣言」を発したことによって，その構図が変わるということはあり得るわけです。再構築が次々になされているわけで，その中の通過点の１つに過ぎないわけです。

聾者が言ったことが正しいとかそういう話ではありません。これまで聾者の定義をしていたのは，聾者ではない人であり，言語学者でも社会学者でもない人でした。もっとハッキリ言うと，聾を障害と見ていた人が構築していた。それに対して，聾者が「そんなの全然まとはずれだよ」という発言力が以前と比べて増してきています。それによって，聾の定義の仕方も変わってくるわけです。「聾」の定義の構築において聾者の関与が強くなっている以上，聾に関する構築主義的な分析を行う際にも聾者の発言を理解する能力が必要だということです。それは当事者主義とは全く異なるものです。

あと，細かいことで二つ。上農先生の言われたことですが，「キュードスピーチ」に対しては，１対１の会話でそういう事例があったということについてはコメントしかねます。私が言っているのは，「指文字」については，手話の中で借用して指文字を使っているという話に触れているのではありません。全部指文字です。全部指文字で指導している聾学校があります。そしてその子ども同士が使っている指文字が，先生がするものとも，子どもが先生に対して行うものとも異なっており，文法的には日本手話のマーカーが使われているのではないか。それが言いたかったのです。

最後に，難聴者から聾者への抑圧の問題についてですが，私は限定的に語ったつもりです。言語的な抑圧がからんでくると，共通して共感できることもあれば，できない部分もあります。そうではなく，ここでは，あくまで音情報として，「聞こえない」ということについての話をしているわけです。つまり手話ができるか，できないかという話になってくると，「難聴者」と「聾者」の間で政治的な摩擦が起きてきます。ですが，音声言語が通じない

ということについてはある程度共感できます。言語的な摩擦については，今回私はふれていません。ここでお話ししたのは，音情報について「聞こえない」という部分については共通する面があるということです。そこに限定した時に，難聴者と聾者とで，すべてではないですが，共感できる部分がある。逆に，「聞こえる／聞こえない」という切り方をしたときに，それは聴者は聾者になれない。聾者である前提条件としての「聞こえないという体験」を共有できていない，ということが言いたかったのです。

**岡田**：今，フロアの皆さんが書いたものを見ながら，金澤先生，樫田先生のお話を理解しようと試みたのですが，議論の流れを再整理し討論のたたき台になるように手短にまとめるのはかなり困難です。質問をお受けしてお答えいただく中で，理解が深まっていけばと思います。で，それぞれの先生へご質問を振り分けていこうと思います。まずは，金澤先生に用語についての質問への回答をお願いします。

**金澤**：シムコムとは何か。Simultaneous Communication を縮めたものです。蔑称的な差別的なニュアンスを含んでいるのではないかという主張もありますが，ともかく声を出しながら手話をするというやり方です。日本手話を使用する立場から見たときに，声を出しながら手話をするのはやめてほしいと非難が出ました。声を出して日本語を話し，その日本語に対応して手話単語をつけていくのがシムコムです。上農先生からでたのですが，サイレントシムコムというものもあります。声無しのシムコム。中途失聴者や後期手話学習者の聾者が声を出さずに手話をするのですが，声をださなくても日本語をいいながら日本語の文法で手話をしているわけです。聾者から見れば，それが本当は声が出ているかどうかということは関係ないわけです。

**岡田**：樫田先生に質問があったのでお受けします。その後に，金澤先生に質問に答えていただきます。

**樫田**：質問は，経験的研究としてエスノメソドロジーは特別に価値があると，主張するのはどうしてかです。理由は，繰り返し言うように当事者の内省に関わりなく社会的に起きていることを起きていることとして記述かつ主張することができる道具立てがエスノメソドロジーにはある。マッキーブニーの事例はその一例である。そういうことです。

視線の動きが呼応しているというようなことは，それ自身社会的に観察可能な経験的事実であって，当事者の内省に頼らなくても研究できることだということを明確に主張している点で，エスノメソドロジーは非当事者主義的経験的研究の理論として筋が通っていると思います。

**岡田**：今の答えについて，明確にしたい点があればどうぞ。ないならば，金澤先生，質問にコメントをいただけないでしょうか。

**金澤**：質問を先取りする形でさっき話した通りですが，質問は「日本手話ができることが必要ということは体験的にも同意見ですが，その問題は日本人が他文化の研究をするときに，その文化の言語が出来る必要があるという事と全く同じでしょうか」ということです。基本的なことは，全く同じです。むしろそれ自体，全く同じである，といって支障がないはずなのですが，実際そうなっていないのはなぜかということが問題なわけです。聾，あるいは手話についての定義の決定権，構築者が言語学者でも，社会学者でもなかったという歴史があります。そして，もう一つは，日本手話の修得が，難しいということがあります。つまり，英語があれば何とか教室というものがあるし，テキストもある。まあ，テキストを使って英語を勉強することの善し悪しはありますが。ともかく文法がある程度ハッキリわかっている。ところが手話はそれ以前の段階にあるわけです。それに加えて，「手話」は手話を知らない人にとって社会的に構築されてきたという歴史があるわけです。もっと思い切って言えば，今，世の中に出ている手話についての解説本のうち，実は，聾者の手話が読みとれていない人が作っているというケースも少なくありません。そこもまた話を難しくしているわけです。ただ，基本的にこの

ご質問はその通りで，そんなにシンプルなところから議論を進めていかなければならない，ということです。それは樫田先生にぜひ聞きたいことです。手話が出来ない立場でも研究ができるというならば，「やれるもんならやってみろ」ということです。どうするんですか。

**岡田**：どなたか，ご質問ございませんか。

**西澤**：研究上の必要性や，研究者の「好み」によって文化を比較検討したい場合，その研究者自身がその文化の言語を話せるにこした事はないのですが，実際には一つの言語を学ぶというのは，大変なコストがかかる事だと思います。例えば，これには，また，別の問題もあるのでしょうが，通訳を使うなど，その言語が出来るか出来ないかという他にも，色々な方法，立場が有ると思うのですが*2。

---

＊2　ここで言いたかったのは，自分の母語以外が話されている，2つ以上の（場合によっては，かなりの数の)「複数の」文化（＝複数の言語）の比較研究の場合はどうなのか，という事である。通訳を使う以外に，それぞれの言語を話せる研究者との共同研究という方法も考えられる（さらに他の方法も有るかもしれない)。この場合でも，一種の翻訳作業が介在し，そこから生じる問題は検討に値する問題となるが，このような可能性も考えられてもいいのではないだろうか。このように考えた場合，仮に，ここで問題とされているように，対象が一つの文化＝言語であっても，必ずしも研究者自身がその言語を話せなくてもいいのではないかとも考えられる。言語をデータとして扱わなくて良いということではない。そうではなくて，もし，当該言語の能力の有無によって，ある研究者が当該文化を研究する事に対する「資格」を論じるようなロジックが有るなら，その分野の研究全体にとってマイナスになるのではないか，という事である。

問題は，研究の中身（＝対象）がどれだけ言語そのものと強い関係を持っているのかという事である（これが先験的に分かるのかどうかという問題は当然有るのだが)。言語との関わりが強ければ強いほど，研究者自身が当該言語の能力を持っていた方が「良い」研究になる事は確かだとは思う。それでも，通訳の使用や，共同研究など，次善の策は有るのではないだろうか。その結果を受けて，当該言語の能力が有る研究者が次の段階の研究をおこなっても良いはずである。以上は，研究の「質」の問題である。

研究の「資格」の問題と「質」の問題は分けて考えられるべきである。

**岡田**：ろう文化だけに，かかわらないだろうというご質問ですね。

**金澤**：一言だけ申し上げます。「色々な方法，立場を認めてもいいのではないか」とのご質問ですが，私は，認めてもいいと思っています。「それじゃ，今までの話は，なんだったんだ」と言われそうですが…。それは禁止するとかそういう問題ではないですよね。研究って言うのは，おもしろければいい。というか，そこに発見的なものがあるならばいい。正確に言えば，「発見」として他者に認められる，通用するものであればいいわけです。やった結果として，それが示唆的であるかどうかの問題です。ですから私は「禁止する」という話ではなくて，手話が読みとれない人が研究した場合，たとえばましこさんや斉藤さんの例をあげて，それが聾者から見ても「発見的」なものとなりえているのかどうかについては難しいですよね，という話です。

**岡田**：とりあえず，後ほど深めていくこととし，ここでは，簡単な質問にこたえていただきます。

**樫田**：瞬発力で，勝負したいと思います。いままで，うまくお答えできてないのですが。これは，大丈夫と思ったのが，金澤さんの質問です。金澤さんの質問に答えられます。金澤さんの質問は，もし，ろう文化というものが，手話と結びついているのなら手話を通さずに理解できないのではないか，ということです。もちろん，できません。けれども，ろう文化が，手話と結びついているという保証がないわけです。マッキーブニーは，何をしたかというと，習慣化されている期待の構造に注目した訳です。音声言語を日常的に使っている人同志の会話では，呼びかける側は背中から呼びかけても，人は，答える事が出来ることを知っており，呼びかける側がそのことを知っていることを呼びかけられる側も知っている。しかし，視覚言語を使っている人同志の場合では，どちらも視覚言語を使っての呼びかけを背中からされることは，ないと思っている。

かわりに，ソーシャルリフレクションという伝え方や，カスケーテイング

で伝わると言うことを，彼らは知っているし，その期待に基づいて行為している。それは，視覚言語を使っていることと結びついての行為ではあっても，手話の具体的な形態とは結びついていない行為である可能性があると主張しました。当事者には外部から観察可能でかつ手話とは結びついていない期待の構造がある，そういう理解が私にはあるので，当事者主義を越えたエスノメソドロジー的突破という主張をしている訳です。瞬発力の勝負になっていたでしょうか。

**岡田**：この問題は，興味深いです。

フロアから，以下のようなコメントがあります。まず，ろう文化については，ろう者のコメンテーターなしで討論するのはよろしくない。質問のかたちでは，今論じられているようなことについて，ろう者の人は，どう考えているのか。また，ろう者を対象とするエスノメソドロジー的無関心は，どういうものか。手話なしで，どこまでろう文化にくいこめるのか，樫田氏は，曖昧であるといったものでした。とても興味深いコメントです。また，コメントに対する反論，ご意見もあると思います。ですが，時間的な制約もあり，ここで十分に論じることはできません。では最後に，上農先生にコメントをお願いいたします。

**上農**：

◎ろう文化が手話に結びついているという保障はない？

先程，樫田先生が，ろう文化が手話に結びついているという保証はないとおっしゃった訳ですが，それを聞いて，今，私は何というか，お話の意味が全く理解出来ない状態に陥っています。エスノについては私なりに勉強しているつもりなんですが，たぶん勉強不足なのでしょう。私は樫田先生のお話の意味が一切理解できませんでした。夜の交流会の折にでも，もう一度教えていただこうと思います。

◎なぜろう者に日本語の力が必要なのか

文書の形で御質問をいただいていますので，そのまま読み上げます。「ろう文化について研究するにあたって，日本手話は必要。これは頷ける。しかし，ろう者の中に日本手話の力も持ち，かつ同時に日本語の力も持ったろう者がいないという意見に対して。なぜ，日本語で研究ができなければならないのか。ろう文化を研究しようとする聴者が，ろう者の日本手話を読みとれるスキルを身につける必要が対等に要求されてもいい筈では。」以上がいただいた質問です。御質問ありがとうございました。

まず言っておきたいことがあります。聴者の方が，ましてやその人が研究者を名乗るならなおさら，日本手話を身につける努力を可能な限り，死ぬまで続けるべきだろうと私も考えています。ですから，御質問にあった御指摘は全面的に認めます。聞こえない人たちだけに，一方的に日本語を身につけろと言っている訳ではありません。

◎私の基本的立場

ただし，その一方で，なぜ私がろう者に日本語の力を身につけて欲しいと考えるかについては，次のような理由があります。私の基本的立場は，金澤先生のように「ろう文化」や「日本手話」を真っ直ぐに研究するというのではなく，むしろ「難聴児」のことをずっと考えてきました。難聴児というのは，これはろう児も同じなのですが，その多くが聞こえる親の元に生まれてきます。9割は聴者の親から生まれると言われています。つまり，聞こえる親と聞こえない子供という，互いに全く異文化でありながら，家族という共同体であらねばならないという事情を持った人たちです。聞こえる親が聞こえない子供に対して「善意」という思いから様々な対応をする結果，複雑な問題が起きます。その問題状況を少しでも是正したいという思いがあります。そのためには，聞こえない人たちが自分たちを支え，誇りを持つための文化的な基盤である日本手話の意義を聴者の親に向かってしっかり伝えてもらいたいのです。その具体的な伝達の方法として，書き言葉があります。文章で示してもらわないと，聴者がその意義を理解するのは現実的になかなか

難しい面があります。

◎日本手話を学ぶ上での壁

これは多くの聞こえる母親たちがよく言うことなのですが，市田さんや金澤先生の話を聞いて，日本手話の必要性，重要性は理屈ではよくわかりました。じゃ，その日本手話を身につけたいと思った時に，まだ十全な学習プログラムやカリキュラムシステムは開発されていません。私も手話の研究者に会うたび，一日も早く適切な学習環境を作ってくれるよう要請しています。それから，文法という話が先程，金澤先生から出ましたが，日本手話に関する語用論的辞書がまだ一切ありません。辞書らしきものはいくつかありますが，語用論的（プラグマティクス）辞書がないのです。そのため，聴者が外国語として日本手話を学ぼうとする時，非常に大きな壁があるままになっています。

◎手話と書記日本語という二つの共通のコード使用への努力

質問の中で反発された方は，英語帝国主義と同じように，日本語をなぜろう者に押しつけていくのだとお思いになったのかもしれませんが，私が言いたことはそんなことではありません。勿論，ろう者にとっての母語である日本手話の獲得を阻むような環境は絶対変えていきたい。しかし，同時に，やはり聴者である親，あるいは私のように聴者でありながら何かしら聞こえない人たちにかかわろうとしている人間が，共に何か少しでも理解が出来るようになるためには，共通のコード，理解のためのコミュニケーションシステムとして日本語の読み書きも大変申し訳ないけれども身につけてもらいたいと希望するということです。同時に，私たち聴者も出来る限り日本手話を身につける努力を死ぬまで続けていきたいと思います。以上です。

**岡田**：ありがとうございました。これで終わります。

**＝文献表＝**

新井孝昭　1996「『言語学エリート主義』を問う」『現代思想』24―５：64―68。

市田泰弘・樫田美雄　2000「言語としての手話・文化としてのろう」『徳島大学社会科学研究』13号：53―80。

石川　准・長瀬　修編著　1999『障害学への招待』明石書店。

樫田美雄編　2000『障害者スポーツにおける相互行為分析―平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書―』徳島大学総合科学部『社会調査実習報告書』刊行プロジェクト（徳島大学付属図書館所蔵）。

金澤貴之　1998「ろう文化の社会的構成」『解放社会学研究』12号：43―56。

木村晴美・市田泰弘　1995「ろう文化宣言」『現代思想』23―３：354―362→1996『現代思想』24―５：８―17。

木村晴美・市田泰弘　1995『初めての手話』日本文芸社。

木村・長谷川・上農　1996「ろう者とは誰か／手話は誰のものか」『現代思想』24―５：110―136。

ましこ　ひでのり　1996「おとのある世界／おとのない世界―少数言語日本手話をとりまく社会環境」『解放社会学研究』10号：135―162。

McIlvenny, P. 1995 “Seeing Conversation : Analyzing Sign Language Talk.” Paul ten Have & George Psathas (eds.) *Situated Order : Studies in the Social Organization of Talk and Embodied Activities*, University Press of America : 129―150.

斉藤道雄　1999『もうひとつの手話』晶文社。

上農正剛　1996「ろう・中途失聴・難聴―その差異と基本的問題―」『現代思想』24―５：52―57。

上農正剛　2000「リテラシー問題を議論する際の前提条件」『トータルコミュニケーション研究大会報告書　日本型二言語教育を求めて（その２）日本語の読み書きの力』：54―76。